

〔資料紹介〕

和歌山大学附属図書館紀州藩文庫蔵

『温知和歌集』——翻刻と初句索引——

三 村 晃 功

凡 例

- 1、本稿は和歌山大学附属図書館紀州藩文庫蔵の『温知和歌集』天・地二冊を、忠実に翻刻したものである。
- 2、翻刻に際しては、次のような方針に従った。
 - 1、漢字・仮名の別、仮名遣い、送り仮名などすべて底本のままとしたが、漢字の字体は原則として通行字体に改めた。
 - 2、底本の誤脱、誤字などはそのままとし、明らかに底本の誤りと認められる場合に限り、(ママ)と傍注した。
 - 3、底本の見せ消し、補入などはそのままとした。
 - 4、便宜上各歌に一連番号を付し、初句索引に便ならしめた。
- 3、解説は成立の問題を中心に言及した、前号の拙稿『温知和歌集』の成立(『京都光華女子大学研究紀要』第41号、平成十五年十二月)を参照されたい。
- 4、初句索引は、歴史的仮名遣いによって配列した。その際、一連番号の二つある場合は重出歌であることを意味する。
- 5、本稿を草するに際して、翻刻のご許可を賜った和歌山大学附属図書館長・橋本卓爾氏に、厚く御礼申し上げる。

〔翻 刻〕

温知和歌集 天(題簽)

温知和歌集 上(内題)

早春

宋世

1 春といふことの葉はかり偽のなき世しられて立霞哉

鶯

2 えそあかぬなく鶯のこゑの中にあやふきみたる春の朝風

春月

3 いと、しくかすみくらせる夕月夜おほつかなきをいかて春^{はる}けん

春日遅々

宋世

4 待えたる春の日影に何をして身の徒になりしといふらん

山花

同

5 山桜やまとはあらぬ唐の吉野々花はにる色そなき

花手向

6 ぬさとちる別や惜きさすか又風こそ花に手向しにけん^(ママ)

藤

7 春にあはむめくみもらすな咲藤か末か末葉の露の身までも

路卯花

8 又そみる色あらためて桜ちる木の下道にさける卯花

郭公

宋世

9 まつ事もなき身にはよし郭公そをたに老のなくさめにせん

社頭橘

10 神垣にきねか鈴をもかけてけりみさへ花さへ匂ふたち花

五月雨

11 いづらこの水分山は名のみしてひとつなかれの五月雨の比

夏草

12 秋もやは茂るか中に姫ゆりのひとりさき出る露の涼しさ

七夕言志

13 隔行中の衣となりもせはかさぬや星の手向ならまし

萩

14 夜もすからそよきし音の何^{なに}なれやあやしくむすふ萩の朝露

女郎花

宋世

15 つよからぬ風の□かたを野へにたにのこ^ゑらてたてるをみなへし哉^さ

秋夕

16 秋やなをあらぬ恨もそひてましうきみひとつの夕なりせは

野虫

17 霜枯て有にもあらずかけろふの小の、草根に残る虫のね

老人馴月

18 ふけはつる我老らくもさかさまに返してみはや秋の夜の月

擣衣

- 19 うつ人もさすか紙也うす衣ねぬならはしに夜をかさねつ、
杜時雨
- 20 北よりそ時雨はそめし神南備の名にふりにたる杜の木影も
落葉 宋世
- 21 麓にはついにみちぬ松もなし嵐の染る峯の木の葉に
氷
- 22 芳野川いもせの中の契までむすふとみゆる薄氷哉
竹霰
- 23 玉霰竹のふるねの生かはる世をはみるともたまりやはみむ
雪中厭人
- 24 跡つけぬよしや心のみちしあらはとはれすとても庭の白雪
松作友
- 25 神にとや心はなひく榊葉の春さす枝も松のみとりも
古寺鐘
- 26 暁の鐘きくたひに思ひやるつるの心や西の大てら
山家 宋世
- 27 うきまゝにおもひはいらし任^仕はてはくやしかるへき山のさかしさ
瀧
- 28 歎くそよ吉野々瀧にうかひ出る哀我みのはてはいかにと
夢
- 29 昔今のうき世中を人とは、ねぬにみへつる夢語せん
神祇
- 30 まれもよこの神の名の玉椿^ともとの千年もあらたまる迄
夜燈 雅綱
- 31 たれかみんかすかにすたく蛩とも草の庵のよるの燈
新秋 雅親
- 32 おもひやる心の千しほたつた山また初秋の木々の村雨
同 雅綱
- 33 身にそしむめ^{マシ}にはさやかにみえぬるに桐の葉しめる秋の初風
同 正徹
- 34 一葉のみ落てそみゆる今朝やまた秋風ほそく木のまわく覧
同 常安
- 35 一葉ちる音をさそひて降雨に梢の秋の色やまたる、
新秋 道賢堅歟下同
- 36 かねてより秋をもまたて染けるか一葉にたくふけさの急雨
同 為数
- 37 秋きてはしらすいくかにならの葉のまたき時雨も降やおく覧
同 堯孝
- 38 いまよりの夜寒の露やこれならん村雨さそふ初秋のそら
七夕 義将

- 39 七夕のなと初秋と契りけん末にはななき夜半もこそあれ
同 等持院
- 40 織女のなみたの露に天川水陰草やなをなひくらん
七夕 雅世
- 41 彦星の衣たちぬふ織女やねかひの糸のくる夜待らん
同 成賢
- 42 待過し年月よりもけふの日のくるゝやいそく星合のそら
同 道堅
- 43 ふちはせにかはらし物を天川あすにもあらぬけふの契は
同 宗砌
- 44 楮の葉にかきしや昔此神のけふ御手あらふ水のうたかた
同 堯孝
- 45 絵^ゑにかける姿をもみぬ織女に心うこかす秋はへにけり
七夕 元泉
- 46 七夕のおなしためとや白露^{しろつゆ}のとる草葉あれははらふかちのは
同庚申七夕 素欣
- 47 さをしかの星の逢夜は更過て月なき山の猿の一こゑ
同断 正徹
- 48 更にけりねぬ夜の後の鳥のねをなきてなつけそ星合の空
同
- 49 七夕の織手につけぬいと薄よそにみたれて秋風そふく
同 元盛
- 50 けふしこそ雲井にかよへ露のまに袖ほしあひの天のかく山
七夕 显阿
- 51 天川よるへまとをにさす棹の一夜のふしや星合のそら
萩 勝定院
- 52 風わたるふるえ^えの萩も花散て月にそ残る宮城野、露
同 勝光
- 53 玉とみるあさけの露や花の名をみかきそふ覧もとあら萩
同 貞親
- 54 白露のおきそふ程も紫の色にしらるゝ庭の萩原
同 基定
- 55 秋はきの花すり衣うちしはれゆく手にかゝる野への夕露
萩 堯孝女
- 56 ま萩さく花のゝ錦織はへて色をは萩の露やそふらん
萩 遠村
- 57 下葉まで色付のへの秋萩は花にあまりて露や置覧
同 堯孝
- 58 さく花も下葉も色のか萩原まついつれにか心うつろふ
同 祐雅

- 59 花や散萩のほすえに風過て野中の清水さ、なみそたつ
同
- 60 我身さへ秋ふく風の名をかりていくる野もせの萩そみたるる
萩 頓阿
- 61 宮城野々朝露わけて秋萩の色にみたる、しのふもちすり
同 正徹
- 62 花も葉もうつろひそめて朝夕の露のみ寒きをの、萩原
同 道堅
- 63 もる露を猶おきとめて秋萩の花に下葉の色そあらそふ
萩 普広院
- 64 萩をふく音をきかすは松風をさひしとのみや思ひしらまし
同 貞世
- 65 秋きぬと萩の葉ならす風の音に心をかる、露のうへ哉
萩 堯孝
- 66 夜やなかき老やいさときかくはかり昔はき、し萩の風かは
同 親長
- 67 き、わひぬおなし軒端にふくる夜の秋風たかき松の下萩
同 道堅
- 68 音たて、はらふ物から聞人の袖には露を萩の上風
同 常房
- 69 音たてぬ軒のしのふの露なかなひけはそよく萩の上風
女郎花 祐雅
- 70 へたてあるこすのおほの、女郎花たれにたはれて露けかる覧
女郎花 賢盛
- 71 女郎花しほる、秋の思ひくさおなしたねよりしける比哉
同 宗伊
- 72 春の野にみし若草か女郎花秋はをしかの妻こめて鳴
薄 実量
- 73 露なかなひく尾花を分行は袖に浪こす野への秋風
葛 賢盛
- 74 行かへる鹿の音ちかし葛のはのさやく霜夜の岡野への宿
秋野 義嗣
- 75 霜むすふ野原のあさちうら枯て虫のねよはる秋風そ吹
秋野 雅縁
- 76 ま萩原千種の糸をくるすのに日をへておるや錦成らん
鷹狩 道堅
- 77 たかの名のつみも忘れて狩くれぬいまや心ものへのかや草
夕日さす秋の山もと霧晴てとは田の稲葉露そみたる、
同 道賢
- 78 伏見山時雨をさそふ秋風に鳥羽田の面は雲そ色付
同

- 80 初雁 堯孝
秋風やはやさむからしくれぬまも夜の衣をかりの初声
- 81 初雁 雅親
なく雁の涙はそめぬ雲路まで哀ふかむる秋の色哉
- 82 同 頼之
ぬしやたれ田面に落る雁かねのいなはにむすふ露の玉章
- 83 鹿 実量
なにをかは友ともきかん山里にね覺を鹿のこゑなかりせは
- 84 同 道堅
ひたふるとおとろかせとも鹿のねをなきよすかと秋田もる庵
- 85 同 同
弓はりの月のいるさの山の端に心へたて、鹿や鳴らん
- 86 霧 道堅
こく舟は思ふとまりやそことなき露の籬の嶋めつりして
- 87 霧 正暁
ほに出る秋のおもひを誰にかはつ、みこめたる小田の夕霧
- 88 同 堯孝
あま衣霧にしほれて夕ま暮いつら田みの、嶋としもなし
- 89 駒迎 同
心さへ行にまかせて月もなきたちの、駒やこよひむかへん
- 90 同 元盛
信濃なる御牧の駒やもち月の名に逢坂に今夜引らん
- 91 駒迎 正徹
逢坂に雲の上人向ふ夜や月けの駒のくもるともみす
- 92 同 堯尋
舟よはふまの、浦風はるくくと月も夜わたるま、のつき橋
- 93 同 道堅
長月の月の名たかく影晴ぬこよひづくに雲の行らん
- 94 同 教親
須磨の浦関もる月の影にのみ心をとむる秋の里人
- 95 同 教長
明渡る光にうちのむさし野は空にはてある秋の夜の月
- 96 秋月 元泉
はらひつる雲より後は吹風もおさまる夜半にすめる月哉
- 97 虫 道堅
庭もせになれぬる鳥もおとろくか鷹のおふさの鈴虫の声
- 98 擣衣 元盛
浦ふれて衣うつなるおきつかせ寒くなるほの海士の衣手
- 99 紅葉 常勲
嵐山秋の錦のたてぬきにそむるとなせの滝の糸すち

- 109 徒にしらすは猶も伏見山はつ雪みゆる明ほの、松
雪 祐雅
- 108 朝日さすのへの篠原露きえてちりかひくもる玉霰哉
霰 教長
- 107 しくる、や木の葉なきら^るん槇のやの軒の雫は音そ^もきこえず
同 道堅
- 106 木の葉をはさそひつくして木枯の声こそ秋の形み成けれ
同 道堅
- 105 木の葉のみちりしく比の山川に紅^くる^る、^{々々々}鳩の通路
落葉 堯孝
- 104 生田川水の秋さへと、まらて木の葉を送る森の下風
同 雅世
- 103 村時雨ふるかた見えて山端にうつりさためぬ夕日影哉
落葉 雅縁
- 102 今朝は、やきのふにも似ぬ時雨哉冬たつ雲の衣かふらん
時雨 後花園
- 101 はけしさもきのふにけふはまさきちると山の嵐冬やきぬらん
同 雅親
- 100 白露のをのか名にあふ色ならて紅葉をいかに染ならひけん
初冬 雅縁
- 119 難波江におふるのみかはおしなへて此あし原は冬枯にけり
寒芦 同
- 118 もる田井に余りし水もつくはねのすそわの風にこほる冬哉
氷 正徹
- 117 うつもれて雪にもいまや朽ぬらんをの、ふる江の海士の笹屋は
同 元盛
- 116 たかりも麓の野へとふる雪を送るやいくかこしの山風
同 元盛
- 115 今朝みれば雪も八重山きのふまで時雨のみにてしからきのさと
雪 賢盛
- 114 君かみんけふのためとて昔よりつもりやそめし富士の白雪
同 範政
- 113 ふりそむる都の□しの曙やあつまの雪のみな月の空
同 賢盛
- 112 こと山にめつらしとみる雪よりもなれてめかれぬ富士の白雪
同 元盛
- 111 富士のねや都にとをき常盤山時しらぬ雪の道を重て
同 元盛
- 110 とはねねは□もいとはす朝戸明て独詠むる雪の山里
雪 祐雅
- 同 道堅

- 120 同 道賢
 なには江やかれてもしけき芦の葉に夕霜まよふ浦風そふく
 冬月 祐雅
- 121 たかねなる雲に有明の月寒くふりこぬ雪を払ふ山風
 同 道堅
- 122 氷しくさゝ浪かけてかゝみ山雪はみかける有明の月
 同 時阿
- 123 雨さむみ軒の板まや氷るらんしつくはもりてもらぬ月哉
 同 堯孝
- 124 冬かれぬ陰を契りて松か枝に月の桂やとりとらまし
 千鳥 道堅
- 125 明石潟せとこす風やあらからしかよふ千鳥も須磨の夕なみ
 千鳥 堯孝
- 126 こよひ又妻やこぬみの浜千鳥ほかなく浪に恨てそ鳴
 水鳥 和氏
- 127 あし鴨のむれゐるかたの池水やこほりもはてぬ汀成覧
 同 堯孝
- 128 霜寒みみな冬枯の草か江にひとり青葉の鴨そ鳴なる
 同 雅親
- 129 さゆる夜の玉藻の床はかはれともたちゐはなれぬ鴛鳥のこゑ
- 130 鷹狩 雅縁
 水茎の岡辺もしるくやかたをの鷹ひきすへて出るかり人
 鷹狩 元盛
- 131 水茎の岡の狩場の雪の内にかくれぬ鳥の跡をみる哉
 同 道堅
- 132 くれぬるか鷹よひかけてならしはや山下とよみいそく狩声
 同 同
- 133 あまた立鳥の落草かりのこし帰るかたのやおほえなるらん
 炬火 持政
- 134 あつさ弓まとゐのとけき埋火のしたまたれつる音かと思ふ
 同 道堅
- 135 古は心もとめすいまさらに老の友なるねやのうつみ火
 神楽 堯孝
- 136 霜寒み杜の木陰の里神楽落葉をさへや庭火にそたく
 同 道堅
- 137 雲の上になを有明の影なからうたふ月ゆみ春そちかつく
 歳暮 同
- 138 花らくのちかつく程そいそかれし昔はとをき年の暮哉
 同 同
- 139 我身こそうきたる舟よ老の浪よるへかはらすくるゝ年哉

- 140 同 堯孝
越かゝる年の浪さへ長閑なり春もや四方にちかの浦風
- 141 松有佳色 為頼
ことの葉のつきせぬ色に数みえて春は緑のわかゝの浦まつ
- 142 三月尽山 正徹
卯月までたな引のこれ弥生山けふはかりなる雲も霞も
- 143 故郷雪 親元
春にみし近き形みや志賀の山散くる雪の花の古郷
- 144 黄葉 政為
口なしのまた下染の梢までえもいはぬ色の初成けり
- 145 河紅葉 宋世
瀧田川水にせきても紅葉はの木末によとむしからみそなき
- 146 寄硯恋
我うらみ書はつくさし取筆の海も浅しと人やみる覧
- 147 山家 宋世
山の井のたよりもとめて住人やおもへはあさく世をいとふらん
- 148 往事渺茫 同
世の中は何かかはる春に匂ひ秋にうつろふ花も紅葉も
- 149 野雉
御狩にももれて行野々草かくれ冬こもりせしきゝす鳴なり
- 150 詠花鳥和哥 宋世
うちなひき春くる風の色なれや日をへてそむる青柳の糸
- 151 正月
春きてはいく夜も過ね朝戸出に驚きゐる窓のむら竹
- 152 二月 同
かさし出る道行人の袂まで桜に匂ふ二月のそら
- 153 狩人の霞にたとる春の日をつまとふ雉のこゑに立らん
三月 宋世
- 154 行春の形みとや咲藤の花そをたに後の色のゆかりに
すみれ咲雲雀の床にやとかりて野をなつかしみくるゝはる哉
- 155 四月 宋世
- 156 白妙の衣ほすてふ夏のきてかきねもたはにさける卯花
郭公しのふの里にさとなれよまた卯花のさ月まつ比
- 157 五月芦橋水鶏 同
- 158 時鳥なくや五月の曙にかならず匂ふ軒のたち花
槇の戸をたゝく水鶏の曙に人やあやめの軒のうつりか
- 159 六月常夏鶉川 同
- 160 大かたの日影に匂ふみな月の空さへおしな床夏の花
短夜の鶉川に残るかゝり火のはやく過行みな月の空
- 161 七月女郎花鵲 同

- 162 秋ならは誰に逢みんをみなへし契りやおしき星合の空
- 163 長き夜にはねをならふる契りにて秋待えたる鵲の橋
- 164 八月鹿鳴草初雁 宋世
- 165 秋たけぬいかなる色と吹風にやかてうつろふもとあらの萩
- 166 なかめやる秋の半も杉の戸に待程しるきはつかりの声
- 167 九月薄鶉 同
- 168 花薄草の袂の露けさをすて、暮行秋のつれなさ
- 169 人めさへいと、ふか草かれねとや冬まつ霜にうつら鳴なり
- 170 十月残菊鶴 同
- 171 神無月霜よの菊の匂はすは秋の形みに何を、かまし
- 172 夕日影むれるる鶴にさしなから時雨の雲そ山めぐりする
- 173 十一月枇杷千鳥 宋世
- 174 冬の日草木のこさぬ霜の色をはかへぬ枝の花にまかふる
- 175 千鳥なくかもの川瀬の夜半の月ひとへにみかく山あひの袖
- 176 十二月早梅水鳥 同
- 177 色うつすかきねの雪の色なからとしのこなたに匂ふ梅か、
- 178 詠めする池の水にふる雪のかさなる年ををしの毛衣
- 179 十五夜月 牡丹花
- 180 あふく名の高き光や天地のかきりにすめる秋の夜の月
- 181 浦霞 元信
- 182 心なきあまも春しる時ならし浦のみるめの霞む夕なき
- 183 里梅 元信
- 184 春風のかかりよりかさそひきて主しらぬ梅の香に匂ふ覧
- 185 春月 同
- 186 月そうき雲たにしはし心あれな霞むは春のならひ成とも
- 187 待郭公 同
- 188 つれなしとおもひそ果ぬ郭公待しよころはさすかへぬれと
- 189 早秋 同
- 190 扇をもおきあへぬ程の朝戸出に露こそむすへ秋やきぬらん
- 191 山月 同
- 192 我はた、たつね入へき山かくれ住うしとてや月は出らん
- 193 竹間月 元信
- 194 長き夜も名のみ成けりなよ竹の葉分の月はみる程もなし
- 195 杉雪 同
- 196 二本の杉もそれとはみえぬまでふる河野への雪の明ほの
- 197 祈恋 同
- 198 さきの夜に契りしなくは祈ともしるしはいか、三輪の神杉
- 199 山家嵐 同
- 200 なれて聞松の嵐や山里にうき世の外友と成らん
- 201 寄雨恋 知仁

- 185 思ひやる心にたえむ山路かは日比の雨の雲間なくとも
夕虫 堯空
- 186 なく虫の恨やよそにき、なさん秋の夕をおもひわかすは
浦松 貞敦
- 187 をのつからいく年なみかこえつらん磯辺の松のおなし緑に
河月 公条
- 188 さためなき瀬瀬より吹川風の心もみゆる月のうき雲
水鳥 伊長
- 189 池の面の水のあやより織なして色こくなれや鷺の毛衣
秋夕 宗清
- 190 木々深き沙の麓うちしめり霧の底なき入あひの声
春月 元長
- 191 おほかたにかすむならひの月影も老のとかなるおもかもめして
暮春 隆康
- 192 春の色よいまよりいく日有明の月に霞は立とまるとも
山月 和長
- 193 たれすみて我ある山とおしむ覧月は出かての影もわりなし
寄木恋 宣秀
- 194 枝かはす松をためしにおもふそよ世よにくちせぬちきりありとは
歎冬 公音
- 195 名残おもふ人やとはぬよしの川花より後の花の歎冬
関中雪 重治
- 196 はらふへき道こそなけれ松かえの雪もこほる、よもきふのやと
待花 尚顕
- 197 さきやらぬ日数の程を花にみはさかり久敷色かならまし
夏草 範久
- 198 風すくる麓の野辺の夏草にみたれてむすふ露の涼しさ
夏月 尹豊
- 199 夏の夜は誰かうちねん山の端に出るとみえてあくる月影
夏祓 済俊
- 200 もろ人のけふは御祓の河の瀬にあさの葉ならしなひく玉藻は
七夕 諸仲
- 201 天川いく世の秋の空かけて年の一夜も数つもるらん
杜蟬 為豊
- 202 いく夕立ぬるつらん空蟬のなく音涼しき松の下露
待空恋 知仁
- 203 待わひぬひとり臥して呉竹のあかす一夜も長き契を
稀問恋 同
- 204 よしやた、忘れんとすれは玉章のかくたまさかの情をそみる
惜時鳥 実隆

- 205 まちてき、聞てもあたにおもふらん人にはあたら時鳥哉
採早苗 正徹
- 206 ぬれてほす露のあさけの玉たすき夕日をかけて早苗取なり
経年祈恋 同
- 207 よはらすは猶いくすちの年の緒を引しめ縄となして祈らん
落葉深 同
- 208 冬枯の庭の嵐になれきて水なき渕となる木の葉哉
初冬風 同
- 209 風の名の嵐の山は昨日より寒きや冬のはしめなるらん
首夏 同
- 210 けふみれは卯月の花の下紐やはやときか^かへる衣か^{くる}へかな
立春 正徹
- 211 む月てふ世は人毎にあたらしきけふの衣に春やたつらん
月下浅茅 賢房
- 212 吹風のたえまにみえて月影をしはしそやとす露のあさちふ
関路鴈 秀房
- 213 幾秋か行もかへるも逢坂の関路さはらぬ初かりの声
残暑 栄雅
- 214 身にしむる程こそなけれとる扇手に任たる秋の初風
月前神楽 言国
- 215 あきらけく庭火に月の影そひて神もいさむやその駒の声
祈恋 宋世
- 216 玉の緒を神のみしめにより合せ逢にしかへは猶や祈らん
山花盛 雅教
- 217 しら雲も峯の桜に咲^そふやさなから花にうつむ山の端
寄月切恋 雅綱
- 218 月にとひ月にかこつもうきは身の思ひにつもる秋のよなく
春 雅俊
- 219 乙女子かこやあさねかみ青柳の霞の袖にかゝる緑は
湖郭公 雅秀
- 220 にほの海や浪のいつくそ時鳥一声さそふおきつ嶋風
雪 政顕
- 221 朝戸出の嵐になひき雪に伏てとを山みする軒の呉竹
寄河恋 雅業
- 222 おもひねの枕にふかき涙川あふ瀬の波を袖にかけはや
杜紅葉 勝秀
- 223 行秋の名残をとめよ村時雨かけも老その森の紅葉々
秋夕傷恋 宗関
- 224 何ゆへと、はむもいさや白露のおもひけぬへき秋の夕暮
宇津山 光広

- 225 宇津の山若葉は春にしけるとも我分らん鶯のほそ道
木曾懸橋 俊治
- 226 世を渡るあやうきは猶山にてもおなし道行木曾のかけはし
嶺雪 元長
- 227 柴人の往来のみは峯つゝき雪に絶たる松風のこゑ
社頭花 親俊
- 228 いかにして人はいとはん桜花ちるにましはる神風そふく
述懷 正徹
- 229 この世にはほまれある名も何かせん花に春風月に浮雲
旧恋 後花園
- 230 くみてみよ野中の清水其俣におなし世にすむもの心を
寄筏述懷 実隆
- 231 月も日もはや瀬の筏暮ことに帰る水なき行衛しらすや
変恋 実世
- 232 はかなしやつゐのよるへと待すくす心なさを人はならはて
山葵 雅世
- 233 葵草かくるみとりのかみやまもかはらぬ色に年はへにけり
逢不会恋 祐雅
- 234 さらにいまつき恋路に入ぬともしらてや人の遠さかるらん
霧中初雁 雅親
- 235 嶋かくれなくはつ雁は朝霧にこき行舟の音まかふなり
逢不会恋 基綱
- 236 くやくしくそれを限の面影とかねてしらぬはさたかにもなき
古寺嵐 堯孝
- 237 とは、やなおもふうき身の初瀬山峯の嵐はさもあらはあれ
南北擣衣 満元
- 238 かたふかて月すむ方の枕にも跡にもちかくうつ衣かな
雪中梅 兼良
- 239 白雪のみのしろ衣春はきぬかさしてゆかん梅の花笠
夏朝 基綱
- 240 あかすみしはしゐの朝けそのまゝにみしか夜なから残る月影
水辺落花 今上御製
- 241 水上に嵐やおちて瀧つ瀬の岩にくたくる花の白波
待郭公 基綱
- 242 しのひねもあまりまたるゝ時鳥心なき名はそれもたゝすや
郭公一声 実隆
- 243 なきてこし道たかへすはほとゝきす又かへるさの一声も哉
郭公欲帰 今上
- 244 五月雨におつるも梅の花はねに帰るはしるや行郭公
夕立 牡丹花

245 吹ほさぬ雫も涼し夏衣日も夕立の杉の下陰

野月 雅親

246 あたに置露にはあたし月影をやとさしと吹のへの秋風

月前鐘 実隆

247 此比の月に夢みる人はあらしねよとの鐘は声もたゝなん

秋夕 兼良

248 よしやそのいづくもおなし秋ならはたへて詠めん宿の夕暮

紅葉 今上

249 山姫のそめてもしらし紅葉はのあさ日夕日にまさる千しほは

風 月前落葉 基綱

250 霜よりも松のみさほにまつみえて木の葉をつくす山風そふく

庭霜 通秀

251 百敷や出入履の音さえて真砂にこほる庭の朝霜

落葉満染 実隆

252 はらはてや石間の木葉秋の色も立帰りみんな水の白なみ

桧雪 邦高

253 朝ほらけ桧原か上の山風に晴たる雪や又くもるらん

待雪 兼良

254 日数のみ津守の浦の空さえてまつにはふらぬ雪そつれなき

夜恋 今上

255 身ひとつにかこちよせても秋のよのかきりは人につきぬ情を

寄虎恋 兼良

256 しるや君虎にあたへし御法にもあはすは何か身をもかふへき

述懐 雅親

257 とすれは人の上をはもとけとも哀なすへき身のわさそなき

簷忍草 勝仁

258 忍ふをも草はにつけてかなしきはふるき軒はのよゝの面影

鞆中嵐 宗祇

259 身こそ猶行末しらね嵐にも雲は宿かる夕暮の山

石清水 実隆

260 石清水さらにもいはしみつかきの久しき君をまもるちかひを

瑞籬 今上

261 天津風ちかひのまゝの身にそひてまもる心のあけの玉かき

神 祝言 基綱

262 此比の諫のつゝみ苔おひておさまれる世を聞そうれしき

露 義政

263 みたれあふ野への千草の花ことにうつろひ分る露の色哉

山家月 穠家

264 山風のたゝく夕はき、捨て音せぬ月そあくる柴の戸

立春 雅親

- 265 春のくるあしたつの音もいつしかに長閑成けり住吉の浜
初春 雅親
- 266 くる春の色もみとりにあらはれて小松か原は雪ぞ消行
霞 同
- 267 さたかには霞むとたにもみえわかけて常よりとをき春の山の端
年内立春 同
- 268 あら玉の年の緒のこる日数にもたかいそくとて春のくる覧
立春 同
- 269 さえくし雪氣の空は長閑にてけふ出そむる春日影哉
野外朝霞 同
- 270 若草はまたそれとなき冬枯の野原になひく朝霞哉
春月 心敬
- 271 面影は春やむかしの月なから我身ひとつに霞空哉
簷梅 同
- 272 我なくはしのふの軒の梅の花ひとり匂はん露を悲しき
舩雁 同
- 273 我うへに帰るならひの春もかな老の浪路に遠き雁金
懷旧 同
- 274 なきはみなうつゝにかへる昔にて独今みる夢そかなしき
授記品 実隆
- 275 種しあればさかさらめやは山桜ときもそきも花の春風
十三夜月 正徹
- 276 袖にもる雪間の影そ猶ほそき夜は長月の中の三ヶ月
明月如昼 同
- 277 中空にてる日の影は望月ののほれは午の時もかはらす
初冬朝 同
- 278 出る日の昨日にかはる色はみすさゆるや冬のしるし成らん
初冬時雨 同
- 279 晴くもる時雨を冬とかくはかり定なき世にたれ定めけん
海辺眺望 堯孝
- 280 伊駒山それかあらぬかほのくとあくるなるおのおきつ白波
秋夕 正徹
- 281 うきをしる袖をはらひて立さらん涙そやとれ秋の夕暮
鶯 宋世
- 282 これやこの花をぬふてふ笠とりの山かけ近き鶯の声
子日 同
- 283 君に契り我身をいはひ心をも二葉に分て引小松哉
花 同
- 284 しはしたゝさかすは花を待おしみよしあし人の心見えしを
同 同

- 285 散行をあたなる物とみる中に我身おとろくやま桜哉
藤 宋世
- 286 一本の松はさなから埋木のひとしれぬまでかゝる藤哉
富士 兼載
- 287 まよひこし夢路隔て行雲やこの世の外の富士の曙
同 同
- 288 風の上に雲もおよはぬ名そ高き山は富士のね月は秋の夜
寄田恋 雅世
- 289 あらをたやあせこす水のたよりたに浮身を秋の後はしられす
螢 公条
- 290 山吹の花の露かも夏草のくち葉にもゆる夜の螢は
稀恋 実隆
- 291 おもひをけよもなからへしけふの後ありしにお。月日へたては
寄手向恋 俊量
- 292 うき中を祈るにいさむこゝろ哉たむけのぬさのなひく宮ゐに
古寺鐘 伊長
- 293 鐘の音は曇ともなし初瀬山ひはらの奥の嶺の古寺
紅葉 宋世
- 294 うすくこき錦にそしる立田姫そむる心にへたて有とは
無常 道永
- 295 しはしこそ有ともみつれ水の泡のきえぬを人の身にな憑そ
千鳥 実隆
- 296 月もいまきよき河原の明かたに立や千鳥の影もさかはす
三室山 宣秀
- 297 幾秋の色もかはらてみむろやま神代のましの榊とるらし
寄糸恋 重親
- 298 いろならん行衛もはてもしら糸のわくかたもなき恋のみたれは
旅宿春月 宗清
- 299 越やらてみよとや月もとゝめ釵晴る霞の関のした臥
寄枕恋 永宣
- 300 あはれ又人にはうとき手枕を涙にかして恋つゝやねん
別恋 兼成
- 301 鳥かねと何恨みけむきぬゝをおもへは明る夜こそつられ
山村烟 雅行
- 302 山ふかみ一村さひし夕煙たかすむ里のしるへ成らん
途中契恋 政顕
- 303 人もわけ我も入野の初尾花忘るな袖の露のかことも
弓張月 元長
- 304 瀧口のとのゐのこゑの深る夜を空にもしるや弓はりの月
湖上月 道賢

- | | | | |
|-----|--|-----|--|
| 314 | ひとりぬるたひにしあればこよひあふ星もやわれを哀とおもはん
七夕祝 同 | 324 | いくとせの春をかけてか玉はこの道に老木の青柳のいと
秋 月 実任 |
| 313 | 空にたつ名をもおもはす絶もせぬ契りならはせあまつほしあひ
七夕旅 同 | 323 | あすよりの春にあはんと思ふ身のさこそはいそくこよひ成らめ
行路柳 常縁 |
| 312 | 星のあふやすのわたりや茂上川しはしはかりの影したふ覧
七夕恋 堯孝 | 322 | 立かへりかけをたにみて相坂の関の清水は末やたえなん
除夜 為冬 |
| 311 | 清水にも影やとむらん七夕のこよひを関と逢坂の山
七夕河 | 321 | うきふしもあらしとそみる百敷やみかきの竹の千世の行末
逢不会恋 為忠 |
| 310 | 契をもむすふやこよひ天川水かけ草のつゆのまにく
七夕山 堯孝 | 320 | いまよりの夕の空に秋きぬと人しもつけす荻の上風
竹 二条為親 |
| 309 | けふとてやあまつひこ星天つ空の雲のはたてに待わたる覧
七夕露 同 | 319 | 霜むすふ天つ乙女の袖の上に光そへたる雲の上の月
秋 師賢 |
| 308 | 嶺の雲詠め下して木幡山ふしみの沢田月やまたまし
七夕雲 堯孝 | 318 | をやまたのいなはの空をわたるなりかりほの廬の秋の村雨
豊明節会 慶運 |
| 307 | 花薄をれとはみえす行かへる袖に入野々秋の夕かせ
眺望日暮 宗関 | 317 | 偽の心を鳥やしりてましあけ行空を、のれつけても
秋田 浄弁 |
| 306 | いつまてと契りをゐなの湊川からきうしほの中をわくらん
風前薄 覚恕 | 316 | ちはやふる神も光をやはらけてたのむ心をさそてらすらん
待恋 尹賢 |
| 305 | かすめともにはてる浪のさよ風にひらのねとをくかゝる月影
寄湊恋 正徹 | 315 | ことの葉のひかりかさねて君かよにあひ逢星と道てらさなん
神祇 義持 |

- 325 須磨の海士の塩たれ衣秋をへてうら地の月そ袖になれ行
冬 祐夏
- 326 吹風の空にうきたつ浮雲のまなく時雨て冬はきにけり
籬菊 詮平
- 327 露霜もしらぬ籬の菊の花こや仙人の袖そふれけん
寄鏡恋 雅藤
- 328 山鳥のはつおの鏡はつかにも影みぬ中にうらみわひぬる
雲雀 実福
- 329 折しもあれあかるところはあそふ糸の空を心の雲雀成らし
巖王品 隆永
- 330 さきの世のねかひのまゝに生あひて又後までの身をそたのしむ
竹 堯胤
- 331 里のあまの宿^宿とひゆけはまさこ地に緑の竹をはらふ浦風
観音品 実通
- 332 たのもしなちかひあまねき法の門さしてあふかぬ人しなければ
牧春駒 兼良
- 333 冬枯はなつみし駒も引かへてあらゝ、牧の春のわか草
樹陰蕨 堯孝
- 334 さきさかぬ山路の花の下蕨心もわけて折やそへまし
里郭公 浄空
- 335 橋姫の待夜を、のか契とや里とふ宇治の山ほと、きす
早苗 公綱
- 336 ときぬとよろつの民のひまをなみいづくも小田の早苗取らし
夕白露 持為
- 337 露に咲て秋そまちかき芦垣の八重に一重は夕顔の花
氷室 勝光
- 338 千年までかきりはしらし松かさき君にそなふる氷室成せは
潤底泉 為富
- 339 すゝしさもわきてしるらし谷ふかき岩まの清水むすふ心は
新秋 堯孝
- 340 草も木もなひく計の色はあれと露にそしるき秋の初かせ
祝萩 兼良
- 341 さよふかき萩のはむけを吹風に光もそよく有明の月
秋夕 浄空
- 342 心にはいくしほそめぬ夕まくれむなしき色の秋の哀を
松雪 雅康
- 343 我君のゆたかなる世を先みせて下にや春を松の白雪
七夕天象 常房
- 344 身にそしむ秋なき波もいかならん君か行きの天の川風
七夕地儀 同

- 345 七夕も岩戸のせきの名をかへてこよひやこゆるあふ坂の山
七夕植物 常房
- 346 そともなる梶なくしそ置露の下葉とるへきけふの朝霧
七夕動物 同
- 347 よそにきく秋とや鹿はうらむ覧うは毛のほしのあへる契りを
七夕雑物 同
- 348 いく秋かおなし川瀬に七夕のたなゝし小舟こきかへりけん
七夕人事 常房
- 349 かすとても星やかへさむまれにたにかさねぬ中の夜半の衣は
七夕神祇 同
- 350 秋もか^けふなぬかの星のいなり山空にあふ夜と神やしるらん
織女契久 宣綱
- 351 いく秋かためしにひかん七夕のたむけの糸のなかき契を
寄枕恋 宗綱
- 352 よなゝの床の涙のうき枕身さへなかるといかてつけまし
湖雪 教房
- 353 よる浪は汀の雪にかはるまで下より氷るしかの大わた
惜歳暮 為富
- 354 したひえぬならひは身にも積きて猶おしまるゝ年の暮哉
寄鐘恋 兼良
- 355 いまはうしと思ふ心のつくからにねよとの鐘のこゑもうらめし
寄絵恋 貞常
- 356 いはてうき心の色をうつし絵に思ふこと葉をかきやそへまし
暁述懷 亮孝
- 357 さまゝにみぬ世の外のことほりもね覚にこもる暁の空
橋上雪 雅康
- 358 旅人の行かふ跡はいつともえそ白雪のふるのたか橋
沢鳴 教房
- 359 たつ鳴のすめる沢へに行水の数かく物や羽おもなるらん
残鴈 勝光
- 360 霜をさへはらひかねたる鴈かねのつはさやおもき雪の曙
山路尋花 牧丹花^{マツ}
- 361 みるや誰春の山道たてぬきに心ゝの行末の花^{ハナ}
梅有天下栄 雅俊
- 362 花もよにさかふる春を秋つすの外にもしれと梅の下風
同 同
- 363 なへて世の春をのけとみ咲梅の花の宮古の色やこと成
同 同
- 364 なへて世の心の花も色みえて行かふ人のかさす梅か枝
岸柳 仍覚

- 365 ふく風の岸による浪よる糸のむすひもあへす露の青柳
春 音羽川 道堅
- 366 春やけさ峯たちこえし年波もかはる音羽の谷の川風
同 玉嶋川 同
- 367 白波の玉嶋川のあさこほりいつとけそめてかすみ立らん
同 宇津山 同
- 368 分暮しうつの山もとうつゝともみぬかたたとる春の夜の夢
同 末松山 同
- 369 年こえし空も程なくみるか内にかはるや春の末の松山
同 大井川 同
- 370 大井川ゐせきによとむ春のかたも浪まにさらす夏衣哉
夏 篠田森 道堅うた敷
- 371 たちぬれて誰かきくらん郭公しのに篠田の森の下露
同 伊香保 同
- 372 菖蒲引伊香保の沼のいかはかりうき身はなかき音をも鳴覧
秋 泊瀬山 同
- 373 初せ山河音すみてくるゝ日の影よりむかふ秋の初風
同 龍田山 同
- 374 うす霧の立田の山の木のまよりまつ色かはる秋の初風
同 宮城野 同
- 375 袖ぬれて木の下露にやとりせはものや思はん宮城のゝ原
秋 小倉山 道堅
- 376 あま雲の小倉の山になく鹿やよそにつれなき妻をこふ覧
同 宇治川 同
- 377 河音もたか枕にかくたくらん秋風寒き宇治の山陰
同 武蔵野 同
- 378 なをさりの袖たに露はふる郷郷を秋立そめし武蔵野ゝ原
冬 鏡山 同
- 379 鏡山つるに暮ゆく年毎にもとみし影のかへる物かは
春 葛城山 実世つぎ
- 380 春の色はよそにもしるし棹姫のかつらき山にかゝる白雲
春 志賀花園 実世つぎ
- 381 浦風よ志賀の花園うへし世の心をしらは浪もあらすな
同 三嶋江 同つぎ
- 382 かへる雁契り置てやみしま江のあしのわか葉の末の秋風
同 塩竈 同つぎ
- 383 いつもみる浦こく船も塩竈の煙の外の春のあけほの
同 宇津山 同つぎ
- 384 あふ人も夢路計の宇津の山我入みちはくらき霞に
同 吹上浜 同つぎ

- 385 春風に浪かあらぬか花^花ならはしはしはよきて吹上の浜
湊川^春 実世^{マミ}
- 386 山もみな霞の底にみたと川月はいつくの雲を行らん
大淀^同 同^{マミ}
- 387 忘れしないつくはありとも大淀の浦のみるめも春をのみこそ
田籠浦^同 同^{マミ}
- 388 みぬ人におしくも有かな田籠の浦浪にまかする春の藤波
末松山^同 同^{マミ}
- 389 一年のおなし浪にやか、らましおしむは春の末の松山
大井川^同 同^{マミ}
- 390 暮ていにし春の名残や大井川嵐の花をのこすしからみ
信太杜^夏 実世^{マミ}
- 391 おりはへてしのたの森の千枝にもやあまる思ひをなく郭公
天香具山^同 同^{マミ}
- 392 ほすとみし衣やいかに程もなく又五月雨のあまのかく山
初瀬山^秋 同^{マミ}
- 393 はつせ山けふ吹そめし秋風をまちとりかほの入相の声
小倉山^秋 同^{マミ}
- 394 花薄麓の野へは白妙に独小倉の山そくれ行
清見関^同 同^{マミ}
- 395 清見かた思ふに浪の月ををきて何をか秋の関守にせん
鏡山^春 実世^{マミ}
- 396 またる、は春の面影か、み山老をはよそにかすみへたてよ
浮嶋原^冬 同^{マミ}
- 397 浪の底雪の上にもなかれきてこほらぬ月のうき嶋か原
飛鳥川^雄 同^{マミ}
- 398 あちきなやわか世はけふかあすか川いつをこれそと思ふせにせん
長栖橋^同 同^{マミ}
- 399 身の上にかけてもしのへ橋柱くちしなからの名は残る世に^を
生浦^同 同^{マミ}
- 400 いつのまにかくはなる身そおとろくや行とし浪のおふのうらなし
春 雅経
- 401 昨日かも年は暮にし天の戸のあくる待ける春霞^かよな
同 同
- 402 若葉つむゆかりにみれは武蔵野々草はみなから春雨の空
同 同
- 403 かすむより雲路にのみそ声はするさはへの鶴ものへの雲雀も
同 同
- 404 山風の吹ぬるまゝに音羽川せき入ぬ花も瀧のしら波
同 同

- 405 雲もうし嵐もつらし山桜まかふとみれはちりはてにけり
春 雅経
- 406 限あれは今宵もすてに更にけり暮かたかりし春の日の
夏 同
- 407 袖の色もうつりにけりな夏衣はるはくれぬと詠せしまに
同 同
- 408 たつねはや五月こすとも郭公しのふの山の奥の一こゑ
秋 同
- 409 あさくらやきのまる殿と誰とへは秋をもなのる萩の上かせ
同 同
- 410 久堅のあまの羽衣まれにきて契りはつきぬ星合の空
秋 雅経
- 411 夕月夜やとる山田の露の上にかりねあらそふ稲妻の影
同 同
- 412 有明の秋そ名残は大はらや月を、しほの山の端のそら
同 同
- 413 深草や秋さへこよひ出ていなはいと、さひしき野とや成なん
冬 同
- 414 行秋のわかれし野へは跡もなした、霜ふかき浅ちふの原
同 同
- 415 あはれにもをの、をとまていそく也松きる山の年の暮かた
恋 雅経
- 416 ほに出し蘆のふしはの下みたれ入江の波に朽ははつとも
同 同
- 417 哀ともいつかは人にいはれの、いはれすかゝる袖の露哉
同 同
- 418 山のはに入まて月をなかむともしらてや人の有明の空
同 同
- 419 物思ふ心ひとつに秋ふけて人をも身をも葛の浦風
雑 同
- 420 やとれとや苔のさ蒔うちはらひ旅行人を松の下風
雑 雅経
- 421 雲にふし嵐にやとる足曳の山のいくへに夕暮の空
同 同
- 422 草のはにしほれふしぬる袖枕夢やは結ふ夜半の白露
同 同
- 423 野辺の露山の雪と立ぬれてかことかましき旅衣哉
花未遍 宋世
- 424 諸人のとひくるよりそなへて世はまたしき花を宿にしりぬる
挿頭花 同

- 425 山桜かさすもあれといやしきに誰家つとのをも荷とかもつ
寄花恋 宋世
- 426 花と見ておられぬ水や人心うつろふ中の涙なるらん
初花 実隆
- 427 ほのかなるた、一花の桜色にうつろふ四方の心をそみる
秋夕傷心 同
- 428 身にかさる物とはしらぬ哀さそかこつかなき秋の夕暮
田家鳥 同
- 429 心あれやいそく早苗にほと、きす山田のはらの雨に鳴声
漁舟連波 同
- 430 むれ立て天とふ鳥とみるかうちに行衛は雲の浪のつりふね
河柳 実隆
- 431 なひきふす川そひ柳をのか糸はさそふ玉藻に根をたえぬへし
落花 教国
- 432 雪とのみ青葉むもれてちる花のうらみを松にわすれてそみる
立春風 兼成
- 433 雲井よりけふ立春の梅か、を風やあふちに吹つたへまし
霞始聳 同
- 434 曙の山のすかたのめもはるになるやかすめるしるし成らん
野辺霞 同
- 435 春日の、若紫にかすみつ、もえ出けりなしのふもちすり
田若菜 同
- 436 かへすへき田つらはるかにせきいれし水のふるせる何とつまなん
巖残雪 同
- 437 ふむ跡や消ると成て白雪に一すちみゆる岩かねの道
待鶯 同
- 438 初春の朝ことにとちるき置人にまたるれ谷のうくひす
暁更梅 兼成
- 439 棹姫の袖にたくかと梅の花匂ひみちたる暁のそら
夕梅 同
- 440 たれありてそめ出すらん紅の夕日を梅の花の千しほに
柳 兼成
- 441 青柳の糸をあはをに吹むすひふきとく風は日々にくいたひ
礪春草 同
- 442 こよろきのいそくとするも若草をのるてふ駒やしはしすさめん
江春月 同
- 443 難波江やあしのつのくむひまくの水も朧に霞む月かけ
去鴈遥 同
- 444 みるうちに遠くならすは山の端にた、うつし絵の雁の一行
尋花 兼成

- 445 花はまた木のめにこもる山をまつしめをきつゝもとめてこそいれ
初花 同
- 446 つれなしとえやはいふへきうちとくるけさはうれしき花の下紐
雨後花 同
- 447 雨はるゝ青葉の中を吹わくる風こそ花の色香とはなれ
羈中花 同
- 448 咲花のみやこそゝきてあまさかるひなのなちは春としもなし
落花 同
- 449 よしさらは又こむ春やたのめをかんことしは花の散つくすとも
躑躅紅 同
- 450 下水をから紅にそむるとはたれいはずゝし咲てうつろふ
蛙 兼成
- 451 水口の雨かときけはもろこゑに蛙のあまた鳴にそ有ける
春欲暮 同
- 452 おしめとも限となれる春の日はまねくかひなき玉鉾の道
首夏藤 同
- 453 ぬきかふる我衣手をきてみれば春のことなる松の藤浪
余花 同
- 454 今更にをくれて花の遅桜くれにし春の後のかたみに
新樹 同
- 455 いづれともわか葉にしけりあひにけりときは木も只一みとりを
葵 同
- 456 名にしおふ葵の葉とてたかために日影といへはかたふきぬらん
里郭公 兼成
- 457 はつこゑは深山にもらす時鳥遠里をのにいつるきなかむ
市郭公 同
- 458 霍公たゝ一こゑに市人も過かてにする三輪の山もと
橘 同
- 459 橘にすむ仙人のみたれ碁や年ふる迄のあかぬ友なひ
池菖蒲 同
- 460 ひきてこそななき根はしれ生ましるまこもあやめのしけき池水
朝早苗 同
- 461 朝露のをくてふ早苗ひまもなくおり立田子のとりくの袖
夏月涼 同
- 462 みしかよもふけての後は河風や秋かと計月のさやけさ
鵜川 同
- 463 月をうき程を心のうかひ舟かすあまたなる篝火の影
蓮 同
- 464 たきしめし跡もしはしはから衣そのうつり香の深き蓮は
氷室 同

- 465 年もまつ豊なるへきためしをはかねて氷室の山にこそみれ
野夕立 同
- 466 分まよふ草より草のしけき野にふりきほふなる夕立の空^雲
蛩 同
- 467 日をへたる雨にくちぬる草くやくれて蛩の数はそふらん
見花無憂 宋世
- 468 あかすみてしたふ心の花はねに憂はわか身にかへらすもかな
残暑 兼成
- 469 残ぬるあつさやはたうすもの、扇の風を手にとまかする
待七夕
- 470 星合のまたき日数をかそへつ、ふなよそひする天の河なみ
山家萩 兼成
- 471 しめをくも山した庵は軒ちかき萩のはならて音信もなし
萩 同
- 472 小萩さく野への色こそさかりなれ山の錦はいつのころしも
薄 同
- 473 露によれ風にみたる、いと薄道はわくとも見えぬふる跡
蘭 同
- 474 諸人のきてはみれとも藤はかま野わきの跡はほころひそする
竹露 同
- 475 呉竹の葉分の風の吹たひにかすく露の玉そくたくる
秋夕雨 同
- 476 入あひの鐘より後の秋の雨に帰る木こりの袖はひかたし
虫怨 同
- 477 うらかれの草を独か身の上に恨みかはなる虫の声哉
鹿声添霧 同
- 478 明わたりいほりに近き棹鹿の声をこめたる霧の籬^{本ノマ、}
雁 同
- 479 たか方の玉章ならしあやしくもつらははなれてくる雁のこゑ
駒迎 同
- 480 相坂の関路はるかにしのきこしつかれやすむるもち月の駒
待月 兼成
- 481 出やらぬ月の高ねに立まよふ雲をそかこつ秋の夜の空
月契秋 同
- 482 行末の千々の秋をや契をかんあかてかたふく月のなこりを
翫月 同
- 483 月にしもうそふき出て盃のめくるに長き夜半もおほへす
見月 同
- 484 雲霧も晴つくしたる月影にむかへは長き夜半も程なし
惜月 同

- 485 山の端の^{本ツ、}にくるならひのあるならはあくまで月の影はみてまし
 壽衣 同
- 486 霜もや、置かさねたるさ夜衣してうつ音の絶ぬ浅茅生
 黄葉 同
- 487 紅葉せんその下染の梢こそ千しほならぬも色はふかけれ
 暮秋霜 同
- 488 野へはみなうら枯はつる草く^にに虫なきよはる秋の暮かた
 山初冬 同
- 489 深山とてはやかれく^にの百草^{あへし}や花^{あへし}。かす。道のあさ霜
 時雨 同
- 490 色かへぬ松とはしりていく度もふるは時雨そつれなかりける
 橋落葉 兼成
- 491 岩橋の苔のみとりも見えぬまで木の葉をしける夜半のやまかせ
 残菊 同
- 492 仙人のおりもつくさて残る覧山路の菊の冬に咲道
 冬夕風 同
- 493 木々の葉はさそひ尽して夕風の声をやとせる桧原楨原
 氷 同
- 494 暁はつたふ雫に氷るかとかけ樋の水の音はたえけり
 寒月 同
- 495 ふけ行は夜半の空猶さ庭に独かたふく月のさひしさ
 千鳥 同
- 496 さよ千鳥や、明行はかたく^あに立別れたる声^あまた也
 鴨 同
- 497 あし鴨もくかにまとへるたくひかところほるか上に氷る江の水
 網代 同
- 498 なかれきてつもる落葉に埋れていつあらはれん瀬々の網代木
 霰 同
- 499 嵐吹雲に霰をさそひきてこゝら玉ゐる庭の真砂地
 湖雪 同
- 500 にほの海や日々の根おろしさえさゆる雪かあらぬか沖つ白波
 筧雪 兼成
- 501 降つもる雪におれふすなよ竹の末は小筧にひとしくそなる
 向炉火 同
- 502 埋火のあたり更たるよするこそ世をおさむへき計ことなれ
 関歳暮 同
- 503 つもりそふ老か身に猶行年をしるてと、むる関守そなき
 暁 同
- 504 明かたの鐘もいとはぬ独るを別の比と誰かこつらん
 薄暮雲 同

- 505 暮はつる嶺の嵐の浮雲はふけての後の月のさはりか
松歴年 同
- 506 二葉よりたれうへ置て雲かくる峯に木高き松の一もと
山館烟 同
- 507 ありはてぬうき世のなかきこりつみて思ひの煙絶ぬ山住
古寺瀧 同
- 508 瀧との、跡ふりにたる流をもとめてや閑伽に猶結ふらん
田家 同
- 509 をしねまてかりつくしたる小山田にたれすむとしもみえぬかり庵
古郷雨 同
- 510 故郷のなかめにまさる水音も下むすほふる庭のちりひち
旅 兼成
- 511 行人を送れる馬のはなむけにいつ又めぐり相坂のやま
猿 同
- 512 郭公待夜更ぬる袖の上をかなしむ猿やまつぬらすらん
名所鶴 同
- 513 和歌の浦の塩干の渴を求つ、芦辺はなれてたつわたるみゆ
野風 同
- 514 野を遠み尾花か末を吹風に鶉の床ぞ定めかねぬる
夢 同
- 515 老にける身のかへりみの浮世こそおもへは夢のた、ち成けれ
祝言 同
- 516 君か代は千ひきはかりの岩かねを天津乙女のなて尽すまで
早春霞 恵空
- 517 春の色それともなしにみねの雪消えぬ。きえて立霞哉
沢春草 恵空
- 518 あさなくもゆる小草のみとりにや沢辺の水は深くみゆらん
暁梅 同
- 519 ふかき夜の夢のなこりも梅か、のおほろけならぬ有明の空
花満山 同
- 520 ゆくま、に雲も霞も咲花の色香に匂ふ春の山ふみ
江上暮春 恵空
- 521 入江こく海士のをふねよこと、はむ春はいつくにかへる浦波
溪卯花 同
- 522 谷の戸は時しらすとや春過て夏まで雪をみする卯花
野時鳥 同
- 523 時鳥きつ、かたらふ声すなり里はのかみの草の枕に
雨後鶉川 同
- 524 か、り火の光りそしるきうかひ舟雨はなこりもくらき夜川に
月夜萩 同

- 525 露は玉とむすひちらして夜もすから月の下萩秋風そ吹
夕虫 同
- 526 夕されは草の葉ことに置露をまちとりかほの虫の声く
海辺鹿 同
- 527 浪よするあまの磯やになく鹿やうらみなれたる妻をとふ覧
閑庭薄 同
- 528 里はあれて草木の中の花す、き色なき袖の露こほれつ、
名所擣衣 同
- 529 衣うつ音そひまなき露霜に夜さむの秋や深くさの里
朝寒芦 同
- 530 つなきをく入江の小舟かすみえて枯葉の芦に寒き朝かせ
深夜千鳥 恵空
- 531 更る夜の空にうらみて鳴千鳥妻やつれなき別れやはうき
故郷雪 同
- 532 ふる郷は軒はの松の雪をみて音に風をとふ人にして
聞声恋 同
- 533 物こしのけはひゆかしく聞人をいかなるかたになしてたのまん
稀恋 同
- 534 逢事の月日になしてかそへはたとえかちなる中の契りを
増恋 同
- 535 面影にむかふ思ひのけふりこそ立そふまゝに身をこかしけれ
怨恋 同
- 536 身のとかにことはりなれてなからふる我かつれなさは誰にうら
みん
被忘恋 同
- 537 おとろかすかひやはあらむ契りしも思ひ忘れてたえはてんには
旅行 同
- 538 我方をかへりみのみに行末のみちはいそかぬ旅の空かな
眺望日晚 為遠
- 539 暮かゝるとを山もとはかすかにて野寺の鐘の声そさひしき
飯鴈 雅康
- 540 憂世とて心もとめぬ春のかりうらやましくそかへり初つる
釈教 正徹
- 541 あやうくもあやうからすも思ふなよ渡す仏のまゝのつき橋
述懐 同
- 542 いか計子あらは我にそむかまし親のいさめし道ならぬ道
社頭祝言 尊海
- 543 治めしる其代にかへせ梓弓やまとの外の高麗百済まで
夕雲雀 為広
- 544 桜咲遠山もとの夕雲雀おちても雲に入かとそ見る

- 545 花下忘帰 光広
比はいま雲井の花におもなれて帰りみもせぬ我宿のはる
- 546 柳露 堯空
白露の玉の緒にとや作保姫のよりかくる糸は青柳の糸
- 547 遠帰鴈 長賢
名残あれや誰かことつてはしらねとも霞に消る雁の玉章
- 548 冬色 伊長
よしの山わすれぬ花の面影をおなし梢にみする白雪
- 549 梅香留袖 勝仁
そことなき道行ふりの帰るさも梅かゝをもき袖の春風
- 550 里雪 公澄
けふさへにとふ人もなくうつもれぬましてあすかの里の白雪
- 551 十五夜 公条
初風におちし一葉の三五夜半にかそへて月のくまなき
- 552 閨中月 堯空
秋風に忘れし閨の扇をも月にたゝへて又やとらまし
- 553 山家 実右
ましはたく山下庵の夕暮に心ほそくも立烟かな
- 554 夏橘 政為
かたしくも此比うすき衣手に風さへきるや宇治の橘姫
- 555 春日社法衆
都初春 政家
日の光いつくはあれと春の色にならの都にまつ霞むらん
- 556 野霞 冬良
棹姫の春の衣を春日野々神にたむけて立かすみ哉
- 557 夕鶯 尚通
くるゝをもしらて木つたふ鶯や花の光にめてゝなくらん
- 558 同
原若菜 徳大寺 実淳
山はまたふる葉なからの松もあれとわかなつむらしかすかの、原
- 559 峯帰鴈 政為
かへるさをいそく心は花やあらね雲ある峯をこゆるかりかね
- 560 花交松 季経
目かれすよ春の日かすむみねの松にたえゝかゝる花のしら雲
- 561 岸藤 元長
のとかなるみなみの岸に咲初てさかり久しき北のふち波
- 562 待郭公 宋世
しのひねはなれも人まつまつらんとむくひしらする時鳥哉
- 563 菰蒲 雅俊
けふといへは緑の色を菰蒲草菰ほにふかぬ軒端をもみす
- 564 早苗 政家
きのふけふとるやさなへもせきいるゝ水もみとりの色そすくなき

五月雨

龍宵

565 五月雨にみかくれぬとも春日野々おとろの道は下にたえめや

嶋夏草

冬良

566 さゆり咲野しまか崎のみつ塩に今朝みし花も波の下草

湊夕立

細川 政賢

567 みなと江や空にも雲のみをつくししるしは波に過る夕立

螢過窓

済継

568 とふ螢ひまゆく影の程なさもあつむる窓やなをおしむ覽と

早涼至

尚通

569 萩の葉もあらぬをとしてふきかふる風こそ秋の初成れけりと

七夕

細川 政春

570 織女のをるてふ糸のふしもあへす棹なくなるまの別かなしも

山居萩

為孝

571 秋の色もうき世の外にみる夢を軒端の萩にさそふ山かせと

女郎花

高国

572 名に立はうき物とてや女郎花とへとこたへぬ色に咲らん

草花露

宋世

573 咲わくる尾花葛花なてしこの花野をときとむすふ露哉

杣鹿

実隆

574 さをしかのつまはよもきか杣ふりて心もひかぬ音をや立らん

老惜月

隱山居士金道 行二

575 したふとはふけゆくかけにおもひしれ老ぬる後の秋のよの月

擣衣

宋世

576 とは、やなうてはくたくる紫紫の花すり衣それはいかにとと

水辺菊

政家

577 さは川のなかれやとをく匂ふらん露もおちそふ菊の下水

歳暮近

雅俊

578 うつりこし月日へたて、あしかきのまちかくとしやくれんとすらん

山家

龍宵

579 さ、はりのうき世になれし心とて此山住もあられるみそ

飯鴈

実隆

580 何の道と昔にかへる時しありて雲井の鴈に春もを知らんと

書

実雅

581 十つあまり三とかそふるもろこしのふみもたかへぬ道のかしこさかしこさ

紙

兼良

582 ひき返しかくともつきし陸奥のまゆみの紙のすきし恨は

筆

持長み583 古のさくらを雲となかめして手にとる筆も絵にのこりけりと

硯

貞常

- 584 跡つけてみるめとならは筆の海にかひあるほとこのことの葉もかな
琴 雅親
- 585 かけかへし二のをこそ今の世に名のみ絶せぬこと、成ぬれ
馬 持為
- 586 道野へやす、まぬま、にうつふちのよはきにつれて駒もおひけり
雲 公保
- 587 あけほの、山かとみえてわたつ海の浪まにうかふ雲の一村
田 実雅
- 588 さなへとる比とやひまも夏ひきのいとなみしけき小田のますらお
海 雅親
- 589 わたつ海の浪の花分行舟もむかふ風をはいとひやはせぬ
風 満意
- 590 はやきせに浪をりかけて行水のあやの川風吹やたつらん
沢嶋 教房
- 591 たつ嶋のすめる沢辺を行水に数かく物や羽音なるらん
薦紅葉 公繩
- 592 宇津山なをいかはかり染つらんしくる、木々の薦の下道
初冬 資任
- 593 冬そとは思ひもあへぬね覚哉夜半の時雨はおとろかせとも
里郭公 実雅
- 594 これも又老かくるやといはつ、しかさしにおれる春の山ふき
遅桜 院
- 595 なへて世の木末や花もなつ山やさらに一木のさかりをそみる
夕顔露 持為
- 596 露にさきて秋そまちかき芦垣の八重に一重は夕顔の花
卯花盛 兼良
- 597 かきりあれば月の盛とみる計はつ卯花のかけやそふらん
安達原 実条
- 598 霜にた、うつみもはてよりたにもあたちのまゆみ色のなかれば
寒夜月 大納言
- 599 秋にみし露をは霜に結かへて枯野の月のかけそさひしき
同 為富
- 600 そらの海の氷を分て出ぬらんさらてもさゆる月の色哉
寒夜月 親長
- 601 板間もる影さへ霜を置かへてはらはぬ袖にさゆる月哉
同 雅康
- 602 いむなりと思はぬ人も寒き夜の月をそしめて詠やはする
同 公躬
- 603 影さむみ松の木のまを吹分てあらしよりもる峯の月哉
同 高濑

- 604 をきまよふ霜夜を寒み雲はいま跡なき月に嵐吹なり
同 基綱
- 605 もとゆひの霜夜かさなる手枕にめてしと思へは月もすさまし
同 為広
- 606 霜まよふ枕の嵐こゑさえて軒端の山に有明の月
同 実隆
- 607 更る夜の月吹しほる木からしに森の雫もつらゝゐにけり
同 永継
- 608 ふけゆけは影さへ^えとをる衣手に霜をきかさねやとる月哉
同 政国
- 609 庭の面はなをしるたへに更そ行雲井の月や霜におつらん
同 宗伊
- 610 行月の中なる水のこほるよや影にも霜の猶むすふらん
寒夜月 政茂
- 611 おきゐつゝこりしく袖の霜をたにやとる月ゆへはらはてそみる
同 頼行
- 612 木からしのさゆるくもまをゆくりなくさそはれ出てこほる月哉
同 ^マ同
- 613 霜さゆるかけすきましく^マ庭の面の朝ちに深き冬の夜の月
同 貞頼
- 614 雲はらふ夜半の嵐を光にてこほれる月やかけみかくらん
同 政熙
- 615 冬の夜は水なき空にすむ月の千里をかけてこほりをそしく
同 元為
- 616 ふくる夜は水なき空もこほり^はけりかたふく月のさゆる光に
同 重信
- 617 白妙のかけをかさねて置霜になを色寒き浅茅生の月
同 玄就
- 618 うちとけてねぬよの月の影さむみ氷をしける床のさ菰
竹雪深 親長
- 619 ふりつみてなか／＼雪やおちつらん青葉をまじる里の呉竹
同 元為
- 620 あしからやふりしく雪のたかければ末葉をわくる竹の下みち
竹雪深 大納言
- 621 降つみしまかきの竹はおれ伏てゆきよりはるゝ窓の曙の
同 宗伊
- 622 山たかみ麓の竹はおれ伏ていく千ひろともしらぬ雪哉
同 公躬
- 623 ふるまゝになひくもおもし百たひの竹のさ枝につもる白雪
同 頼行

- 624 松はなをつれなき軒の呉竹をけちめみせても埋雪かな
同 政熙
- 625 呉竹をちひろにみれば君か代の光もたかくつもるゆきかな
同 為富
- 626 すむ人の千代のかすとも雪おれの竹のこゑのみしけきみきりは
同 実隆
- 627 はれてたにさゑたそおもき呉竹の我友をまつ雪の下おれ
同 貞頼
- 628 うつもる、籬の竹ををのつから軒端の山とむかふ雪哉
同 政茂
- 629 うつもる、竹のすゑはや千ひろまてつもれる雪のしるしならまし
同 永継
- 630 下折の音さへ絶ぬ雪の日のあまり程ふる窓の呉竹
竹雪深 基綱
- 631 舟つなくを川の水におれふして雪のとまふく岸の呉竹
同 高濑
- 632 埋れてそれともみえぬ一村の竹をしらす雪折の声
同 政国
- 633 下おる、程をもまたてなよ竹のよはきや雪のたより成覧
同 雅康
- 634 降雪にまつ下折し竹のはやひとりさめたる色をみすらん
同 重信
- 635 なひくかとみるかうちより呉竹の末こすほとにつもる雪哉
同 為広
- 636 埋れてそれともみえぬ呉竹のありとやこ、に雪折の声
同 政行
- 637 あかすみむ尚ふりそへよ呉竹の千代をこめたる宿のしら雪
同 玄就
- 638 積れ猶ゆたかなる代のしるしを雪にみるへき園のくれ竹
忍逢恋
- 639 こすのとによ深き人のきぬの音をしるへにひけは匂ふ袖哉
同 為広
- 640 いもせ川浅きあふ瀬にいかなれはつ、む思ひの淵は有けん
忍逢恋 政行
- 641 相坂の関路くるしき行末におもふしのふの山そ夜深き
同 雅康
- 642 ふけてとひあけぬにいそき人めよく契はいつをひまとしもなし
同 重信
- 643 よそにもしもれなはさても逢事をたかしのはぬになしてなけかん
同 為富

- 644 したひものつけぬる夜半も物そおもふ人のきかんをつゝむ心に
同 基綱
- 645 忘れしなたゝ夢はかりあひみるも人はわりなき夜半の手枕
同 元為
- 646 すり衣うらなき中にかさねても忍ふのみたれ心ゆるすな
同 政国
- 647 奥深くたちそ忍んふたりみる今夜の月はものいはすとも
同 頼行
- 648 つらかりし限りしらるゝ今夜さへ心の忍ふいとゝみたれて
同 親長
- 649 わりなくもおもひやかはにから人の袖ふることをかけし契りは
同 永継
- 650 こよひ猶人もさこそは忍ふらんあふをかきりの契ならねは
忍逢恋 実隆
- 651 あちきなや又かはかりの逢事もいつの人まをさても待へき
同 玄就
- 652 人しれすむすひをきつるしとや今夜とけぬる中の下紐
同 大納言
- 653 相みてそ心のおくはしられぬる忍ふの山の露の下道
同 高清
- 654 むつこともよしやしのはししるとても人にはいかゝつけのを枕
同 公躬
- 655 もらさしたのめし中はかた糸の逢てふよはもなをそくるしき
忍逢恋 宗伊
- 656 涙ほす袖にあまりのうれしさもなをつゝましくあかす夜半哉
(十六行分白紙)
寄海恋 覚胤
- 657 たのめきてなを逢ことやかきりなき人の心の奥の海山
祈逢恋 公順
- 658 前の世の契もうれし三輪の山神に祈のしるしある身は
寄枕恋 泰仲
- 659 枕たにとらぬ夜床は中ゝに夢てふ物のたのみたになし
寄橋恋 持和
- 660 待たひにいつもきそちの橋ならはかけてうれしき契とやみん
逢恋 雅俊
- 661 さきの世の契りをするも今夜にてなを行末の身をやたのまん
顕恋 静覚
- 662 いかにして跡なきものといひなさんなを村鳥の空にたつ名を
寄枕恋 綱光
- 663 夢にたに人の契はみしか夜のなこりもつらきつけのを枕

- 664 馴恋 季経
いはすともくみてしれかしみなれ河その名につけて深き思ひを
隔遠路恋 基綱
- 665 都なるよるの衣による波を思ふやまさるすまの浦人
忍恋 兼成
- 666 もれ出てはいかにかはせんうつりかをつゝむとするも袖のせは
きに
不見恋 同
- 667 いひかはす言のはとても物こしのへたてをなせる中はなにとも
不逢恋 同
- 668 今までの心つよさにかた糸のあふまでゆらく玉の緒もかな
尋恋 同
- 669 いひよらんだよりを何ともめまし又折つけの人のこゝろは
契恋 同
- 670 我中はつはさならふる鳥となり枝をかはせるたくひとそ思ふ
逢恋 同
- 671 ねかはくはあひみる時の秋の夜を八千代になしてあけすもあら
なん
別恋 兼成
- 672 鳥かねと何うらみけん衣くをおもへは明る夜こそつられ
- 673 後朝恋 同
待よひの心のうちは別にし今夜朝こそ物ははかなしかりけれ
近恋 同
- 674 目にはみて手にはとられぬ面影は夢かうつゝかわきそかねぬる
馴恋 同
- 675 伊勢のあまの塩なれ衣朝夕の我おもひにはいかてひさらん
不憑恋 同
- 676 たのますよこんとゆふへのたひくも偽のみの人の心に
悔恋 同
- 677 あかたへと行はあやなしうき人にむつまじさへくゐのやちたひ
久恋 同
- 678 たひくの涙の雨に色かへぬ心の松はいくとせかへし
忘恋 同
- 679 かりそめの枕にむすふ夢のまやすこしわするゝ時とおもはん
逢不会恋 正徹
- 680 立かへりたゝくもあけす相坂や越し跡さす関の岩かと
聞恋 高政
- 681 夕浪の音には聞てわたつ海のみるめはあらぬ身をいかにせん
寄月忘恋 知仁
- 682 人はいさ月やしるらんわすれ水くみてもあさきその心を

馴不逢恋

光広

683 あふ事のならひしらねともろともになれてもうとき中のわりなさ

変恋

基孝

684 かならすといひし契のいかなれは待夜なからにあくるしのめ

恋

勝秀

685 絶ねた、何に命の残る覧おなし世にある身ともしらぬを

祈不会恋

貞盛

686 祈てもかひこそなけれ神垣やはぬ思ひの隔てなる世に

稀恋

尋雅

687 織女のあらぬ我身も折くはとしにまれなる契かけり

後朝恋

秀行

688 あひみての今朝こそ袖のかはかぬにいかにすきこし昨日成らん

寄鐘恋

光広

689 いかさまに驚かすらんこめやとは思ひ絶ての入相のかね

寄松恋

基富

690 せきあへぬ袖の時雨は隙なくて心の松そ色もかはらぬ

後朝恋

冬康

691 あひみては猶物思ふ身はしらてけさをさりの一筆はうし

祈恋

冬康

692 きふね川あふ事なみに行かへりはては神さへつらき中哉

忍恋

同

693 たか袖も秋はならひと置露を忍ふにつけて世にやしられん

寄風恋

尚道

694 ゆきかよふ我道芝のかれくに人の心の秋風そふく

寄煙恋

冬良

695 いとはる、身をうら浦の夕煙くゆる思ひの外になひきて

寄瀧恋

政為

696 思ひせくみふねの山のやま風そ袖なる瀧のうへにはけしき

寄橋恋

宋世

697 我心かよはぬ中をうらみはや十つなの橋のくりかへしても

寄蓬恋

濟繼

698 ふけにけり今夜も人はよもきふの露けき床のまろねなからに

寄菅恋

699 人しれぬおもひを誰にいはこそすけななきねをのみひとりなめや

寄天恋

公保

700 まれなりとなにかなけかん天川絶ぬ逢瀬を待と思は、

寄日恋

実量

701 とはすともたのめし程は夕つくひさすかに人も思ひ出覧

寄星恋

持為

702 ふけはいる袖の涙にやとれとはなかる、星の影もちきらす

- 703 寄雨恋 資任
ほし侘る袖におちそふ涙よりまつよひ過る雨そ悲しき
- 704 初逢恋 滿意
まよひこし恋路の末の山越て今夜そとまる相坂の関
- 705 白地恋 持為
ぬししらぬ空^たなき物を身にしめて風の行衛のしたはる、哉
- 706 旅恋 実雅
草枕かりなる夢のちきりゆへし^はのふ都そ忘^はてぬる
- 707 忍恋 雅康
徒に思ひみたれて忍ふやま忍ふか露そ下にけぬへき
- 708 契恋 教房
わすれしの千年をかぬる契なれや心のまつ枝をかはして
- 709 尋恋 勝光
たとるそよすむてふ里やさ、かにの糸引たかへ契り置けん
- 710 逢恋 実量
かさねぬる夜半もありけりから衣返す夢さへつれなかりしに
- 711 別恋
したはしなはやいふかひも中くにあけそはなる、衣くのそら
- 712 顕恋 堯孝
たか心うすふたあるの帯なれはとけにし色のあたにみえけん
- 713 久恋 雅親
たのめとよ年ふるまでに思ひますかたもなくくこふるこゝろを
- 714 祈恋 同
神たにもうけぬ契りを繰返しいまは歎の森のしめ縄
- 715 顕恋 兼良
氷とけ波うつ岸のこけ衣きてなれなくにあらはれやせん
- 716 不逢恋 院
絶すせく袖の泪の川とてや稀にもしらぬあふせなる覧
- 717 待恋 雅康
いかにせんさすか契はかはらしと思ひなしても待ふくる夜を
- 718 別恋 公綱
別路の泪にくれて道芝の月にもたとる暁の空
- 719 絶恋 滿意
道芝の露も払はぬ袖はなとかよはぬ中にぬれまざる覧
- 720 逢恋 宋世
猶のこるうらみと思ふきぬくをかねて歎の夜半の泪そ
- 721 恨恋 同
いつのまになれぬる身とてうらむ覧かはす契も一夜二夜を
- 722 忍恋 宋世
さきにたつ涙のしらぬ恋ならはさすか心の色はみえしを

寄露恋

723 我命きえすはありとも何かせん心をかるゝ露の契に

温和和歌集 地（題簽）

温知和歌集 下（内題）

鵜川

宋雅

724 宇治川やよそに朝日の山暮て鵜舟さし出るかゝり火のかけ

蛭

725 あつめえぬ窓の蛭よいつまでか我身を照すしるへともみん

霞中瀧

光広

726 山高みおつとは見えす音するや霞の内の瀧しらなみ

同

光広

727 春風も霞にたえてやま姫の袖よりおつる瀧のしら糸

梅薫枕

728 梅にほふ方とおもへは春の夜をうたゝねなからあかす手枕

春月

729 いかに又あはれそふらん春の夜の月の都のかすむ光は

月

730 分てその名におふ秋も月といはゝかくこそあらめ春の曙

独見花

731 さひしさを花の色香になくさめて春の日暮しむかふ窓哉

嶺花

732 色まさる尾上の松の木の間よりいま一入の桜咲ころ

落花

光広

733 散花の枝にうつらははる風にあつらへつけて吹まつもみん

同

734 咲をまちおしむを花の形見にて雪の木陰に春風そ吹

野雲雀

735 野へみれはまたうらわかき初草やすたつひはりの床となるらん

同

736 長閑なる空には猶も名残あれや芝生におつるのへのひはりは

郭公

737 百千鳥きけともあかすほとゝきす深山を出しおなし一こゑ

同

738 此比は夕の空のたてぬきに声のあやをる時鳥かな

五月雨

光広

739 かきくらし日数あまたに降雨は時をたかへぬ五月来ぬらし

沢蛭

- 740 さてもなをきえぬ思ひに飛螢沢辺の水に影はみゆれと
同
- 741 浮草の露は涼しくあらはれて螢数そふ浅沢の水
七夕
- 742 偽のある世ながらも待ものを今夜はさこそ星会の空
同
- 743 世々へても契そふかぬ天川年のわたりを中にへたて、
女郎花
- 744 なへてをく秋のさかの、夕露にわきてしほる、女郎花哉
同
- 745 いはれ野の露に宿かせをみなへしなひくとみるも花の一時
岡鹿
- 746 たちとをはいつくとしりて棹鹿のおなしをかへに妻をこふらん
尋虫声
- 747 秋の野に虫のねそはん草むらと薄か本をまつそ分ぬる
待月
- 748 よひくの月をまたすは山の端にかゝれる雲をたれいとはまし
湖上月
- 749 浦風も更行月のよこの海や氷をわたる秋の舟人
擣衣
- 750 誰か為にいかにうつらんから衣たへぬ夜寒ををくれ忘れて
同 光広
- 751 槌の音しはしは絶て抱かくす程としらる、衣うつ也
時雨
- 752 吹はらふ嵐の雲の一とをり雲にしられすふる時雨哉
同
- 753 半天にくもるとみるも晴行も間なく時なく村しくれ哉
暁千鳥
- 754 暁のさむき霜夜も宮の中はしらしとつけて千鳥鳴也
炭竈
- 755 やかて又雪けの雲と成にけり焼炭かまにたてる烟も
忍恋
- 756 いかにせんまたつみしらぬ忍くさわする、程も又しなけれは
不逢恋 光広
- 757 人心岩木ならねとはかりをつれなき中に頼むはかなき
増恋
- 758 此ま、の月日なりせはいかにたへんつもる思ひの行末の空
初逢恋
- 759 うきをかこちつらさをわひて今夜さへあふうれしさのことの葉
もなし

- 760 同
つれなさの心もとけてあひみるはいかなるけふの今宵なるらん
別恋
- 761 鐘はよひ鳥はそらねとかこちてもわかれにつらき嶺の横雲
同
- 762 玉しゐをねし夜の床にとゝめても身はわりなしやきぬくの空
恨恋 光広
- 763 露程もいかでもらさんくすかつくるしやかゝるうらみならすは
絶恋
- 764 おなし世にいきてかはかり絶はつる契にかへん命とそなる
同
- 765 いやしくもおもひけちてし人ことにへたゝりかはる中となりనికి
古寺鐘
- 766 声すなり豊楽の寺の日影まで西になりぬる入逢のかね
同
- 767 心して聞やわたらん難波てら昔おほゆる鐘のひゝきは
旅行
- 768 都いてゝなくさむ事もうきふしも野山に□る旅の道哉
同 光広
- 769 旅衣はるかに越てこし山を幾重か埋む跡のしら雲
- 770 天照す神も分てやめくむらん我日本の国やすくとは
神祇
- 771 同
うら松の波に心をよせ初ていつよりこゝに住吉の神
里竹 在数
- 772 誰か里と道のかきりもしられめや行くつゝく竹のはやしは
子日 長嘯
- 773 ひける野のねの日の小松やとにうへてちとせくらへはけふそ初
むる
山家 宋世
- 774 もとめしな心のすめはすむ庵をかならず山の奥ならすとも
寄弓恋 伊長
- 775 なひくてふならひやはなきあつさ弓つよき心もなをしたひみん
檣 道永
- 776 五月雨はふらぬたえまの雲も猶重なる色にさく檣哉
関月 実香
- 777 月のゆく道に岩戸の関もかなかたふく秋のかけを□□□□
寄月恋 公頼
- 778 影をのみ雲井のよ所にみる月のほのかにたにもしらせわひぬる
浦雪 公敦

- 779 けさはなをきのふの上にふりそへて名さへつもの浦の白雪
同 内大臣
- 780 あけてみは猶やつもらむ玉くしけふたみの浦の夜半の白雪
同 公宣
- 781 浦風に波もかゝらてふるゆきに木末になひく三穂の松原
浦雪 中鑑
- 782 さゝ波やつりする海士の袖までも雪にそかへる志賀の浦風
神祇 為定女
- 783 我君のあふくに神もおい松の千年の友と猶やまもらん
同 宋雅
- 784 いく千代か神ちの山のうちにみて外にあらはれ君まもるらん
同 内大臣
- 785 たてかふる春日の神の宮柱千たひや千たひ君そみるへき
同 右大臣
- 786 石清水たえぬ流をくむ君に千代もすむへき影やみゆらん
同 重光
- 787 天地の神代もきかすあし原やいま程国のおさまりしとは
同 常永
- 788 天つ空光をことにあふくかなてる日のみこと月よみの神
同 堯尋
- 789 つもるらん道をも代をも住吉の宮居におなし玉つしまひめ
同 中鑑
- 790 君か代に千たひうつさむ神ちやま瑞殿の宮つくりして
寄燈恋 沢庵
- 791 我恋は風にまたゝく灯の消んとおもふこゝろ成けり
往事夢 賢盛
- 792 津の国のなからに絶し跡なれや昔にかへる夢の浮橋
春鳥 光広
- 793 ことさらに春のしらへにこすの中の声をやかはす宮の鶯
元日 智仁
- 794 なへて世の花の春たつけふよりや錦とみゆる霞成らん
歳暮 弘(中鑑)
- 795 歳せめて一夜の空に飛鳥の翅もいそく□すの春哉
立春 貞徳
- 796 空の緑今朝の朝日の紅に柳桜の春をみるかな
同 勝俊
- 797 ちひろある影をかさしの玉の緒は猶なかに日の初なるらん
正徹勅勘をめしなをされしの後
正徹
- 798 人なみにけふはさしての磯千鳥君か八千世のこゑにひかれて

廿首の哥の奥に 也足

799 かそふれは伊勢のはま萩一もともあしといふへきことの葉もなし

或女ねやに梅の匂ひければ夜更て

女

800 人ならはうき名やたゝむさよ更て我も枕にかよふ梅かゝ

飯雁

家隆

801 詠わひぬ独はなれて行かりの霞にまよふ曙の空

早蕨

802 あやなくも袖こそぬるれ春雨のふるのゝ原にもゆるさわらひ

苗代

803 おほあらしのうき田のもりのしめ縄はなはしろ水にひきやそふらん

歎冬

804 かけやとす井て玉水^{たまみづ}けにくめはしつくも匂ふやまふきの花

藤

家隆

805 染てほすわか紫のふちころも松もねすりの色やわくらん

三月尽

806 都とは雲にまかせて行鳥のかへるふる巢に春やとまらん

菖蒲

807 軒ちかき若葉の梢かけそへてふけるあやめの色ぞ涼しき

照射

808 ますらおかはやまのともし影きえて鹿は命の有明の月

五月雨

809 さゝかにのやともたえ行五月雨に日をへてしけき軒の糸水

盧橘

810 たちはなのかほる夕のうき雲や昔なかめし烟なるらむ

螢

家隆

811 こすの外にまかふ燈ほのかにて螢わけ入庭のよもきふ

泉

812 尋来るをのか木陰のまし水を梢にむすふ松の夕風

六月菰

813 みそき川ゆふかけてけるあさの葉のなをき心を神□□□□

露

814 露や花はなや露なる秋くれは野原にさきて風にちるらん

霧

815 もしほやく海士の浦ちもたえぬらん行衛もしらぬすまの夕きり

槿

816 かた岡の日影時雨るゝ柴の戸にしはしやすらふあさかほの花

駒迎

家隆

817 もち月の駒引袖もうちしめりさ夜更にけり相坂の関

- 818 紅葉
時雨るなりかねてうつろふ神なひの森の木すゑの日くらしのこゑ
- 819 雪
跡絶て野山もみえず降ゆきは木すゑのみちのしるへ成けり
- 820 水鳥
あし鴨の残る霜をや払ふらんうはけにさゆる有明の月
- 821 神楽
風さゆる雲ゐの庭のかは竹にほのかにまかさゝなみのこゑ
- 822 鷹狩
霰ふるしはのうれはをふみ分て狩場の小袖^野にけふもくらしつ
- 823 初逢恋
家隆
しきたへの枕のしたはしほひちてけふもみるめのおひはしめけり
- 824 関
玉章も都へゆかはことつてむ文字の関路を帰るかりかね
- 825 橋
吉野山おもひ入へきかよひ路も世をうき橋をまつやわたらむ
- 826 寄道祝
永慶
言の葉はちりうせぬ松をたねとして世にさかへ行敷嶋の道
- 827 残菊句
道灌
暁のまかきの星の霜くもり空にみたれてにほふ白菊
- 828 寄風恋
秋に吹こなたを風のやとりともわするゝ露やよそにかくらん
- 829 同
珍阿
はかなしな人の心の秋風にしはしの夢の行衛たになし
- 830 郭公幽
一こゑをしたはん方のこゝろあてもわかつて過ぬる郭公かな
- 831 五月雨
正徹
高ねにはみさりし滝や五月雨になかれて落る富士の白雪
- 832 橋螢
葛城の夜の契やあらはれん螢みたれてくめの岩はし
- 833 籬卯花
実仲
時しらぬ雪と月とや卯はなの籬の山は富士の面影
- 834 寄鳥恋
家隆
うらみすやゆふつけ鳥のわすれても別をとむるそらねはなく
- 835 寄玉恋
公誉
露とのみ消や果なはつらかりし残るかいなき玉の緒そうき
- 836 稀問恋
良恕
よしさらは忘れはつへき中ならてとはれてたとる夢の面かけ
- 837 螢
通秀
ことはりをしれともかなし螢をもあつめぬ窓にくらき心は

五月雨

常縁

838 つなて引淀の川舟いたつらに軒端につなく五月雨の比

山家月

植家

839 山風のたゝく夕はきゝすてゝ声せぬ月にあくる柴の戸

立春

雅親

840 氷とく池のさゝ波今朝見えて水なき空も春風そふく

歳暮

雅親

841 おしからぬ身におしむこそ哀なれさすかに暮る年のなこりを

霞

842 をしこめて春をつゝむと見えてけり霞の衣袂ゆたかに

初春

843 くる春の色もみとりにあらはれて小松か原は雪ぞ消行

立春

844 天となり地とさたまる神代より時の初の春や立らん

歳暮

845 山河にかへらぬ水はこほれとも月日なかるゝ年の暮哉

重陽

公条

846 菊やいまなへての花の七重八重九かさねをいろにさくらん

同

邦高

847 けふにあふ籬の菊の色ことにおほく千秋を花にみすらん

富士

光広

848 名に高きおほひえよりもかさねきて富士こそ雪の都なりけれ

寄雲恋

兼成

849 浮雲のかゝるまよひをなにゆへと我につれなき人にとははや

寄岡恋

洪仙

850 たのめつゝ年のふれとも逢事はなきさの岡の松かくるしき

暮春月

通村

851 又もこむ春はありともやまさくらちりかひくもれ有明の月

旅宿

雅陳

852 旅衣しほれはてけり露をたにほさていくよの草の枕に

氷初結

覚円

853 昨日まで聞し岩根の水もはやけさは氷て音なしの滝

羈旅

経頼

854 朝夕の露にしほれて旅ころもはるかにきぬる程そしらるゝ

田蛙

雅章

855 山河になかるゝ花をせき入てを田の蛙もこゑ匂ふなり

五月雨

永孝

856 五月雨は庭も外山も雲とちてあらぬ岩根に落る滝波

秋恋

歳阿

857 はかなしな秋のならひにいひなして袖は涙の露ふかくとも

- 858 遇不逢恋 光慶
あひみしははかなき夢の面影の消ぬつらさそうつ、也ける
- 859 俄逢恋 貞秀
いつはりとえこそうらみね行末を契りし人に今夜問れて
- 860 朝花 後小松院
明わたる山の嵐の跡までもしはしはにほふ花のよこ雲
- 861 夏鶉 宣胤
鮎はしるかけをもとめてしまつ鳥こ、やあさ瀬にゐるひまもなし
- 862 暮林鳥宿 元長
雲ふかきかたやま林くる、色のはやくそ鳥の声もしつまる
- 863 秋田 経乗
暮毎の秋風あらみもる人やいなはの浪を袖にをくらん
- 864 七夕天象 宋世
七夕の暮まつけふは天照やひるめの神も心あらなん
- 865 七夕地儀 宋世
すか蓐の十ふのうらみん初秋の七ふをかけて星やしこまし
- 866 七夕居所
おもひやる星の契も更ぬらんのこる程なき窓のともし火
- 867 七夕植物
秋をのみふる川のへにたつ杉の二の星も契りくちせし
- 868 七夕動物
織女にあふきの風を手向とや雲に鳴のほるかはほりのこゑ
- 869 七夕雑物
七夕もぬる夜は一夜小車のにしきの紐をいつむすひけん
- 870 七夕人事
ありかほに何を手向む世にわひて我こそからめほしあひのそら
- 871 虫 言繼
さきつ、く秋の花の、から錦なれやはた織虫のこゑく
- 872 山月 後奈良院
一かたに夕ゐる雲もはる、夜のねこし山こし月や出らん
- 873 花 宣秀
軒ちかき一本の花のさき散に四方の梢もたくへてそしる
- 874 冬日 仍覚
木からしにちるやまさきのかつらもてひきとめかたくくる、日
- 875 鶯 秀遠
日にさらす花の錦のおさをあらみなれ織いたす鶯のこゑ
- 876 夜恋 元長
人めなき夜るは心にまかせつ、こふる涙をせかてなかしつ
- 877 初冬 言繼

877 風にちる山のもみちのからにしきけさより冬や立はしむらん

風 後醍醐院

878 こゑをなす風のすかたをたつぬれはうこくかたちそそれには有ける

山家 称光院

879 おなしくはうき世をいとふ友にたにしられぬ山の奥にすまはや

早苗多 後花園院

880 くとあくとききぬ早苗の数くくにきはふ民のかと田成らし

簷梅 後土御門院

881 朝といての軒端の梅に袖ふれて風のうつさぬ匂ひにそしむ

氷 勝仁

882 こほれともたゝひとへなる池水にさゝなみみえてあさ風そふく

閑中月 知仁

883 すむ人をとひくる月は心あれやよもき葎のかけもさはらて

暁 方仁

884 人はかる鳥よりさきと有明の月やこえなんあふ坂の関

神祇 恒明

885 いすゝ川 本ノマ、

早春霞

886 朝明に日のさし出る山の端や春くる方とまつかすむらん

海辺霞

887 霞しく春の塩路をみわたせはみとりの色をあらふ白波

夜聞萩 貞帝

888 我さへにねぬ夜の友ときゝわひぬ風におきふす萩の一むら

見花 邦高

889 木の本にゆきてはるけんよそめにはまよふ山路の花のしら雲

遠郷早秋 貞敦

890 いつしかとその名もしるゝ外山より吹くる風や秋しのゝ里

枯野朝

891 朝霜の色におはなの袖ひとつのへのかれふの外にことなる

鳴 邦房

892 ふかき夜のね覚の枕ものおもふ数より後と鳴のはねかき

夏天 邦高

893 夏山の雲をひたしてなかくる水もみとりの空に涼しき

九月尽

894 秋風も吹つくしてやけふのみと木々の紅葉も枝にすくなき

荒和菰 信輔

895 手を折てかそへつくして思ふ事みそきにすつる心すゝしも

紅葉 政基

896 手向とや秋のをりなす水無瀬山木すゑのいとも錦成らん

- 897 菊移 政嗣
うつろふそ翁さひぬる住吉の浜辺にたてる白菊の花
- 898 山家
うき世をはへたてそはつる白雲の八重たつ峯の松の下廬
- 899 暁 覚恵
さたかなれさらてはしらぬゆく末をつけの枕の暁の夢
- 900 恨恋 教房
恨むるはたのむ心のたくひともしらてや人のつらしとおもはん
通書恋
- 901 なくさまぬいつはりなからやれはおしかへしやせまし人のこと
の葉
春聞恋 教房
- 902 おもひやれ霞にそく春の雨さかぬにたにも袖のぬるゝを
鹿
- 903 棹鹿も君のみゆきをまちかほにわきてたすむ春日の原
月 実任
- 904 かせはこふそともの竹のおきふしに末葉の月の影そくたくる
秋鳥 公益
- 905 おはなしく野辺分まよふこたかり秋より雪のしらふをそみる
会恋 実仲
- 906 年月のつらさわすれてこゝろさへとくる契や夜半の下紐
冬月 公遠
- 907 幾度の時雨の雲を尽しきてなこりさやけき山の端の月
糸桜 季継
- 908 春の日のなかきを藤のしないよりくらへむ枝のいと桜哉
寄月顯恋 実教
- 909 涙さへつゝまぬ中となりはてあらはにやとる袖の月かけ
関路月
- 910 君か代にはや相坂の関越よ雲井を契るもち月の駒
寄風恋 公右
- 911 なひくとも目にみぬ色は吹風のとよりもなをや人たのめなる
古寺嵐 公澄
- 912 のこるへき浮世の夢か高野山曉方の松の嵐に
松 実澄
- 913 陰高き雲もみとりの老松は年の葉かすもさそつもるらん
湖水 公維
- 914 夕されはさゝ波よする音絶て氷にけりなしかのからさき
夏夜 宣親
- 915 夏の日も夕たつ雲のくらき夜にいなつまのまとあくる空哉
山葵 雅世

- 916 あふひ草かくるみとりのうみ山もかはらぬ色にとしはへにけり
舟中月 雅敦
- 917 明行や波ちはるかのおきつ舟風のかた帆に月を残して
寄衣恋 雅庸
- 918 いかにせむつゝむ人めもすり衣わかむらさきの色にみえねは
瀬鵜河 宋世
- 919 とまず火に瀬にふす鮎もおとろくや鵜なはさしはへ舟いそくみゆ
江紅葉 雅藤
- 920 江にあらふ錦はこれかいろもなをからくれなゐのふかき紅葉々
冬地儀 国光
- 921 絶く浪の音さへ今朝は、や氷はて行庭の池水
田里夕煙 光康
- 922 立のほる田つらの里の夕煙なひくや風のすかた成らん
落花入簾 教忠
- 923 ちるをおしむ心しりてや花を今よそにはなさぬこすの追風
浦月 頼継
- 924 舟人もうかれて行はいく浦そ浪の千里にはるゝ月かけ
歎無名恋 秀房
- 925 しらす身のうき名にかへて立かひもあらはやせてなくさみも
せん
- 926 いつれとか梢にわかむわけ入は心の花にかゝるしら雲
尋花 惟房
- 927 まかひこしおち葉を四方につくしてそ時雨ははるゝたえぬをも
しれ
時雨過
嵐山 輔房
- 928 嵐山ふもとのおち葉なかれてはおほ井の浪のしからみにして
後朝恋 氏房
- 929 恨わひぬいつの夜半かはうちとけて衣くしらぬ朝いをもせん
寄鐘恋 有光
- 930 人心うつりやすきはますかゝみ身にそふ影のとなかるらん
後朝恋 宋順
- 931 さたかなる寝ぬ夜の夢の面かけはけさのうつゝにとふかひもなし
時雨雲 隆重
- 932 めくる日のうすき梢やしくるらんたちそふ雲のはれぬ一むら
寄虫恋 隆富
- 933 いつまてか海士のかるもにすむ虫のわれからかゝるもの思ふらん
蕨 言国
- 934 分入て猶やおらまし花かたみ目ならふ山の峯のさわらひ
寄蕊恋 言継

- 935 さてもうき床のさむしろいつまでか我のみひとりしき忍ふへき
寄原恋 隆康
- 936 きぬくのあしたの原の露の身よ消すはありとも又もとはしな
稀恋 永相
- 937 絶はてぬ契りはたのみ七夕のあふ瀬ににたる我いもせ川
暮春 永相
- 938 なかくし日もあかぬまに重りて春もいまはたくれんとやする
山霞 永基
- 939 松にふくかせの音のみ高砂の山の葉遠きあさ霞かな
寄野恋 永宣
- 940 かはかりの袖やはぬれん武蔵の、草はみなから分つくすとも
遇不逢恋 行康
- 941 たゆへしとやはおもひきや烏羽玉の夜半の契りも夢のうきはし
竹 伊俊
- 942 こゝのへのみかきの竹のふしことにこまれる千代を有数にせん
夏鷹 基綱
- 943 分出ん秋もちかしとはし鷹のとや野のあさち露ぞ涼しき
旅 明釈
- 944 ゆくさきを我はいそけと故郷に心はかへる旅のみちかな
月前雁 為定
- 945 めくりあふ契たかへす久方の空ゆく月に鴈はきにけり
月 為遠
- 946 志賀の浦や松の嵐に雲晴てふるき都にすめる月影
早苗 為衡
- 947 さをとめのいまとりくにゆたかなるとしていそくさなへ草哉
橋 為冬
- 948 よさの海松原とをくみわたせは浪間に立る天の橋たて
苔 為親
- 949 こけふかき岩のかけちのまろ木橋いつふみ分て人のとひけん
槿 為親
- 950 をけはちる露のやとりもみゆる哉夕へをまたぬ槿のはな
秋夕 為尹
- 951 沢の鳴鹿の夕声きかすとも涙なるへきうす霧の空
鐘 政為
- 952 きえかたき罪をしれとや老らくの耳にはうときかねの音かな
庭菫菜
- 953 春にさく花にはもれし庭の面はすみれつむ野とすみあらしても
釈教 雅遠
- 954 たのむそよをろかなる身とおもふにも世々の仏のふかきちかひを
恨絶恋 通胤

- 955 うらみしを思ふもはかな人はそのかはらんためのつらさ成けん
見恋 通勝
- 956 うつし絵のたくひならすや徒にうこく心のみるめはかりは
花色 有親
- 957 にほはすは雪とそみまし春の夜ははなの色より曙のそら
煙 重保
- 958 をのつからもしほの烟たてそへてかのこゑきかぬ海士の家ゐは
萩露 重通
- 959 秋風にふきしほれたる草／＼の中に色ある露の村萩
寺近聞鐘 為仲
- 960 暮かゝる寺は難波のあしかきのまちかき鐘の声のさひしさ
暁雲
- 961 夢をふくあらしの跡のよこ雲やたか枕より別そむらん
夕歎冬 承道
- 962 月も今井てのわたりの夕暮に又あらはるゝ山吹のはな
夏朝
- 963 草も木もけさは昨日の夕立の跡をもとめて露を涼しき
梅 道永
- 964 咲梅の木の水は浅けれとにほひの測そそこひしられぬ
暁 道汁
- 965 告わたる鐘をはしめにあかつきのおなし時しる鳥も鳴らん
冬草 道喜
- 966 その色とかれ残たる陰もなし草のかきねは霜そへたてゝ
柳弁春 義俊
- 967 さほ姫のいかにそむらんふかみとりあるより青き青柳のいと
深更逢恋 尊応
- 968 よしさらは夜半のなかはも過てとへけふといひしを偽にして
池水鳥 常照
- 969 今朝はなをみきりの池の氷ゐてところ／＼にうかふ水鳥
山家 覚恕
- 970 しつけさは此世の外とすみなすやたゝ室の戸の明暮の山
女郎花 良誉
- 971 分行は我名やたゝむ女郎花なひくは風の心なれとも
早秋
- 972 吹かふるかせより秋や龍田山木すゑにしるき色はみえねと
秋田 公順
- 973 山風のいなはもそよと吹からにひかぬなるこの音そさひしき
同 経乗
- 974 暮ことの秋風あらみもる人やいな葉の浪を袖にせくらん
霧深 弘恵

- 975 しはし猶ふちせも見えぬ秋の水にたつ川霧や千ひろ成らん
古寺夕嵐 顕春
- 976 こゑたてゝこのふる寺のふることをたれに夕への嵐ふくらん
冬月 淨弁
- 977 置霜の色にまかへてよもすから月かけはらふねやのさむしろ
里竹 慶運
- 978 くればまた一夜やとかせくれ竹の伏見の里に我はきにけり
恋 祐夏
- 979 いのりきやあはてのもりにゆふしめのひくてつれなき心なれとは
春 祐夏
- 980 人とはゝいかゝこたへむくちなしに花もいはてのもりのやまふき
吹飯浦 祐守
- 981 塩風のふけぬの浦に雲きえて波にかゝれる有明の月
恋 名取河
- 982 なとり河うきせにくちぬ埋木のつらきためしに何のこるらん
雑 芳野河
- 983 吉野河いはとかしはをこす水の波の花こそときは成けれ
夏 難波江
- 984 とふ蛩をのれもえてや難波江のあしへの波のよるをしるらん
春 田籠浦
- 985 紫もうつりにけりななく藤の花のゆかりの田籠の浦波
久恋 臨阿
- 986 つみそめていく春秋のおもひ草露を袂にかけぬ日もなし
山夕月 基孝
- 987 うき秋と誰かいひけん夕暮の月にむかへは物おもひもなし
花 兼賀
- 988 ちりやすき憂世の夢の常なきを花にことはる春の山風
春 頓覚
- 989 年くれし昨日の嵐なをさえて雪けの雲そ春にかゝれる
春 同
- 990 おさまれる御代の空にやおほふらし霞の袖のひろきめくみは
同
- 991 時しらぬ山かせさえて春の色のをよはぬ富士に残るしら雪
神祇 了俊
- 992 武者の道のしるへのおとこ山神のみをやもさそ守るらん
郭公数声 実遠
- 993 雲井をは過かてにしてほとゝきすけふのこよひやねをつくすらん
袖上菖蒲
- 994 袖までもひろきめくみをわか君のかくるためしに引あやめ哉
思不言恋

- 995 ことの葉にいてぬ心の色にてもおもひそめぬる程はみゆらん
懐旧 細川 持賢
- 996 なにとなくみぬ世をきくも恋しきや昔にとまる心なるらん
同 細川 持元
- 997 つたへきく袖さへぬるゝいにしへはみし世の人のさそ忍ふらん
同 洞院公賢弟 守快
- 998 おもひいてのあるこそあらめうくてのみすきし昔の恋しかるらん
霍公
- 999 なきてたにわれにかたらへほとゝきすさらてうき身の友もなき
世に
- 1000 たのもしないつゝののりのをしへこそ六のちまたのしるへとも
なれ
積教
- 1001 すかのねの永き日くれぬ雲を分霞をしのく花の山道
凌霞尋花 基綱
- 1002 なかれ出る花の色かの奥ふかく人をは山にさそふ水哉
依水知山花
- 1003 分のほる山をあなたに行つくし又麓なる花をみるかな
越山見花
初春祝言 為重
- 1004 さかこえむ千代のうつえをきるからにむ月もとをき春はきにけり
初春鶯
- 1005 ふる巢をはさきたつ春にあらためて年まち出る鶯のこゑ
白梅盛
- 1006 花にこそまたふゆこもれ梅か枝のさきそふ色を雪にまかへて
寄松祝
- 1007 いく千代もなをあひおいと契をけ今年みつ葉の宿の松かえ
岸柳 為右
- 1008 日影さす水の烟をたてそへて川せになひく岸の青柳
同
- 1009 立田川雪けの水はすみやらてまたかけうすき岸の青柳
津梅 為右
- 1010 難波津のあまの袖まてうつりきて塩になれたる春の梅かゝ
雨後草花 清範
- 1011 江にあらふ錦とそみる初時雨すきぬる跡の萩のぬれ色
野月 基氏
- 1012 月影に露の玉ぬく糸萩をよるは野原に行てこそみめ
浦月
- 1013 みつ塩のひるにかはらぬ秋の夜の月にはゆるせ須磨の関守
月前虫

- 1014 きりくす秋のなかはの月影のかたふくまゝにねをつくす也
寄月懷旧
- 1015 いにしへの秋こそいとゝわすられねかゝるすまゐの月をみるにも
寄月恋 基氏
- 1016 あふ事はまとをの衣夜さむにていく夜か独月をみるらん
深山紅葉 久我通光
- 1017 紅葉は、時雨のみかはたつねいる日数のふるに色まさりけり
海辺冬月
- 1018 おきつ風ふきあけの浜にすむ月は霜か氷か浦人海士人
山路眺望 雅経
- 1019 詠行ふちしろ山の峯つゝき嵐の音も和哥の浦まつ
暮里神楽
- 1020 いくたひの神もあかすやしめの内に袖ふるきねかゆふかくる声
夕立 光明院
- 1021 夕立はすきぬるみねの村雲にしはしほのめく宵の稲妻
旅 尊氏
- 1022 東路をまた旅人の立帰りさはらて君に逢坂の関
寄里恋 公允
- 1023 里の名もいまはたつらし菅原やふしみはよ所の中におもへは
伝書恋 為頼
- 1024 あかすなをかよひなれたる軒の妻のしのふにつたふ露の玉章
池花 永基
- 1025 ちらぬまはかけをうかふる池水やくもらぬ花の鏡成らん
夕卯花 為和
- 1026 旅人やゆふかけしらむ卯の花をよすかに分る小野々細道
(六行分空白)
- 1027 氷留水声 兼右
- 1028 霜雪を水上にしてなかれをはこほりにむすふ瀧の白糸
雑人事 智閑
- 1029 たかためにいそくゆきゝそあさ夕の市路ににたる人の世の中
古砌歎冬 為孝
- 1030 とへかしなさく山吹の色ならて我ことはらん宿の昔を
秋田 顕長
- 1031 秋をうしとなきつゝわたるかりかねの涙や小田の露とちるらん
山家 祐夏
- 1032 竹あめるかきほいまはふりにけりたか世をすてし山の栖そ
恋植物 宗伊
- 1033 いへはえにえこそいふきの思日草おもひはさしもむせかへれとも
霰 親綱
- 1034 白妙の真砂の道に積るかなふるや霰の玉ゆらのまに

- 1034 秋夜 雅永
ふりまさる我身を秋のいねかてになをのこる夜も長月の空
- 夏衣 経郷
夏衣いつたちかへて天乙女雲のま袖に風の涼しき
- 1036 河氷 公助
春もうき嵐の末にこほれるや浪の花さそふ山河の水
- 杜首夏 雅親
なへて世にけふよりうすき衣手の杜のみとりや色をかさねん
- 1037 山家夜雨 重親
夜の雨の音こそたよりさらに今憂世の夢や結びすてまし
- 1038 寄渴恋 龍霄
とをひかた塩くむあまのくるしきも人に心をはこひやはする
- 月前雁 道堅
ほのかなる雲間の月の行衛にも聞わく程の初鴈のこゑ
- 1040 祭後葵 孝盛
神山や露もとる手にもれし草はいつのかさしにあふひをりまつ
- 旅宿夢 親当
草枕露のまはかりとふ夢もいくへ分きつみねのしら雲
- 1042 槿 藤孝
ときのまも契はふかし朝露のけなはけぬへき槿の花
- 1043 寄岡恋 貞隆
うらみても人の心は片岡のまつにつれなき我思ひかな
- 浦舟 常縁
ともなひて今そこき出る和哥の浦やいそにてなかくあまの釣舟
- 1045 海辺月 実隆
明は又浪にやいらん松浦かた月より西に山のはもなし
- 1046 寄草恋 晴通
すゑかけて猶やたのまむ結び置し軒端の荻の露のちきりは
- 契恋 敦通
わすれしな其後の世のみにしまてあかすも思ふ中のこゝろは
- 1048 岸藤 教親
吉野河花はちりにし跡に又匂ひそふかき岸の藤波
- 1049 仏寺 円空
けふも暮ぬあすかの寺の入相のかねて仏の道ねかへとや
- 1050 山寒花遅 冬良
峯の雪花の下紐つれなさの心くらへはいつかとけなん
- 1051 依忍増恋
せきかへす人目つゝみのなかりせは袖行川もかくはまさらし
- 1052 野夕立 匡遠
いつくにかやとりとはまし暮かゝるとをさとをのゝ夕立の空
- 1053

1062	1061	1060	1059	1058	1057	1056	1055	1054
夕日さす紅葉の錦をりはへて雲のはたても色やそふらん 尋花 勝仁	うつしきておさまる道に三の代の昔はとをし今をあふかん 紅葉 実連	露にしめる真砂の月は夏ながら身にしむ霜の色やしくらん 怀旧 実枝	つれもなき人の心のことはりをしらぬうき身や世のならひなる 夏月 実条	なにかおもふふりつくしてもむら時雨色にしられぬ松のこゝろを 不逢恋 雅世	つれなさのかはらぬ色を呉竹の世に人しれぬうきふしにして 寄時雨恋 実世	千へにおもふかひやはあらん立わかれいなみの海のいなやした はし 寄竹恋 公条	うつしうへて友としちきれ二葉よりなれてみかさの松の千歳を 寄海恋 堯空	さみたれのはれまをいつとまつ嶋の塩焼あまの袖にいかなる 栽松為友 兼秀
1072	1071	1070	1069	1068	1067	1066	1065	1064
ことしもやまたくれなましあすありとすくすまなひに身は老に けり	おさめしる世はたれかはと面影のにたるはかりの夢やたつねむ 述懐 龍山	空の海みえてひとつにも塩焼煙につゝ雲の浪かな 寄夢怀旧 実隆	おほろなる光を月の名にたてゝ霞いとはぬ春の夜の空 塩屋烟 智仁	橘の匂ひそ残るしらぬ世の昔はとをき夢の枕に 春 祐夏	みつ瀬川帰らぬ波のよるゝははるかにわたす夢の浮橋 橘薫枕 公音	野も山もあけかたちかく成にけり鐘のこゑゝ鳴のはねかき 無常 公松	こゝろとも成ける物をまくす原ことゝふ風のすこき夕暮 暁 兼孝	いまよりや月にこゝろのひかるへきまゆみの岡の秋の初かせ 恨恋 常縁
1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071
徒に山分衣とをくきて花なき陰のかりねをやせん 岡初秋 為富	いまだよりや月にこゝろのひかるへきまゆみの岡の秋の初かせ 恨恋 常縁	こゝろとも成ける物をまくす原ことゝふ風のすこき夕暮 暁 兼孝	野も山もあけかたちかく成にけり鐘のこゑゝ鳴のはねかき 無常 公松	みつ瀬川帰らぬ波のよるゝははるかにわたす夢の浮橋 橘薫枕 公音	橘の匂ひそ残るしらぬ世の昔はとをき夢の枕に 春 祐夏	おほろなる光を月の名にたてゝ霞いとはぬ春の夜の空 塩屋烟 智仁	空の海みえてひとつにも塩焼煙につゝ雲の浪かな 寄夢怀旧 実隆	おさめしる世はたれかはと面影のにたるはかりの夢やたつねむ 述懐 龍山

- 伴菊延齡 量光
 1073 斧のえのくちし山路の菊なれはしらてそ千代の秋のみるへき
 冬月 綱光
 1074 かれはてしあさちか原にすむ月の光や霜の花とみゆらん
 寄犬恋 義政
 1075 待人やしのひきぬらんさよ更てとかむる犬のこゑそきこゆる
 不逢恋 勝仁
 1076 かゝらすは恋する名ものこさしなよしいたつらの世をつくしてん
 半出月 義正
 1077 てりそはむ影そまたるゝ山の端にかた枝さしおほふ月の桂は
 七夕 蓮空
 1078 七夕のいをはたものにかゝる糸のおもひみたれてあふ夜まつらん
 虎 堯空
 1079 わけいれはよのつねならす山風もはけしき虎のかくれてや栖
 秋時雨 貞常
 1080 さゝの葉も絶て嵐に時雨ゆくとやまの暮の秋のはけしき
 霰妨夢 貞敦
 1081 ぬる夜とてみる夢もなし真木のやにあられ音してさえあかす夜は
 霞間月 為氏
 1082 かすむ夜の雲まの月のかけをたにおいのなみたはまたかこつとも
- 寄松祝 覚恕
 1083 千年まで神やまもらむけふにあひて手向を松のことの葉の末
 月前鹿 後花園
 1084 いかにさてあはれを鹿の声ならん独み山の月すめる比
 紅葉 為忠
 1085 村時雨いかて千しほにそめつらん笠取山の嶺のもみちは
 早春湖 尊応
 1086 春さむみ風さへ氷る志賀の浦や名にたつ程のさゝ波もなし
 里夕顔 宗闇
 1087 川そひの里は烟に暮はてゝみつのを残す夕顔のはな
 沢水鳥 守光
 1088 霜かれのあしまもみえぬ水沢に鴨の青葉の色そのこれる
 初鶯 雅春
 1089 雪の中にまつさく梅のはつ花にはるやあらそふ鶯のこゑ
 寄衣恋 雅枝
 1090 面影もせめてみゆやとさ夜衣かへしてたのむ夢の手枕
 三月尽夕 常胤
 1091 暮そむる春をそしたふ入相の鐘もかすみに遠さかり行
 春駒 専順
 1092 つなかれよしらぬ心のあら駒もことの葉草の春のひろ野に

1102	秋をへて光も影もすみわたる月に名たかき天の橋立 厭恋 興意	1103	よるくはもゆる螢の飛火のに影みる水や鏡なるらん 夏 祐夏
1101	一年のおもひの程にしほれつる袂やこよひ星合の空 橋月 道永	1104	なく虫もおもひあればや秋の野の尾花かもとにねをはたつらん 角田川 祐守
1100	来る春も暮ぬるとしもこよひこそあひやとりして別れゆくらめ 七夕 尊純	1105	ふる里にみなれぬ鳥のすみた河いかてみやこの名にしおふらん 夏旅 親当
1099	わくらはにとへはそしのふほと、きす杉のいほりの有明の声 除夜 智蘊	1106	旅ねする山の下柴折かへてかやりをやと、あかす夜半哉 杜霞 俊顕
1098	野も山もひとつに霞む春の日はときはの杜も名のみなりけり 郭公稀 正頼	1107	こぬ秋の露はよそなる葵草日影に色やまつなひくらん 葵 勝仁
1097	いかにせん時雨にも猶つれなさは常盤の杜の色にならは、 寄草恋 雅胤	1108	しられしな色にいてしとつ、む身は独なけきの杜の下草 郭公 杲守
1096	世のうさや猶あまるらん郭公声のかきりを鳴つくしても 寄蝶恋 法守	1109	まちなれし夕暮ことにさ、かにのいともくるしく物をこそおもへ 早春 冬平
1095	いとはやも春きにけらし天の原ふりさけみれば霞たなひく 早春 冬平	1110	秋ならぬ契をいかにあまの河としのわたりにならひ初けん 沼蒲 盛長
1094	水底もあさかの沼のあさみとり先おり立てあやめひくなり 橘 為良	1111	吹風の涼しきのみかたちはなのかをなつかしみ端居するそて 曙郭公 慶親
1093	引こもる草のいほりに降雨の音しつかなる夏の夕くれ 葵 勝仁	1112	いとはやも春きにけらし天の原ふりさけみれば霞たなひく 早春 冬平

尋虫

正韻

1113 は、木々のありと聞えし虫の音をわくれはきゆるその原の露

七夕後朝

1114 手向せし露の七葉のかちをたえ今朝や別の舟なかすらん

春恋

為重

1115 鶯のはつねはなけとたまは、き手にとる程もなき契り哉

恨絶恋

俊直

1116 さもあらぬ恨を人のいひしこそと絶むためのかこと、はしれ

夏恋

俊量

1117 いまこんといひしたのみにまつ戸をた、く水鶏そいつはりに
なす

鷹狩

克孝

1118 かりくらし霜をそわくるはし鷹のかへる尾ふさのす、の下みち

河上朝霧

公条

1119 橋姫の心も空にこの比のあしたこひしき宇治の川霧

霞中花

基佐

1120 ふけは散ふかねは霞はれかたみ花にそつ、く春の山風

蚊遣火

1121 浦風の烟をはこふかやり火に塩くむ里の海士やくるしき

逢恋

宗鑑

1122 いつはりに今夜やなさんせきわふる日比かこちし袖の涙も

海霞

清超

1123 和田の原みれはそことも白浪にたちかはり行朝霞哉

名所鶯

1124 聞すて、こえやらぬより鶯のこゑも守けり相坂の関

蟬

常縁

1125 吹風や空にかよへる夏やまの峯よりたかき蟬の声哉

秋雲

宋雅

1126 いとはすまた初秋の暁は月にもあはぬみねの白雲

錢別

統秋

1127 いつはあれと春やは人に別るへき手折柳の色につけても

山月初昇

公条

1128 河風に先影はれて麓ゆく水より出る山の端の月

月前草花

公条

1129 野への露うつろひやすき光もてみな月草の花咲にけり

月前竹風

1130 雲晴て月に成ぬる呉竹の葉風に露の光そひつ、

見月思旅

1131 朝たちて出づる人や草枕いつくの月の野への萩原

湖月似氷

- 1132 夜もすから思ひもとかす氷るそとみるから崎の月の寒けさ
月前孤舟
- 1133 月ならて我友舟もしら浪にまかせて出る秋の浦人
月前遠鐘
- 1134 あすか風いたつらにやは鐘の声ふけてねぬ夜の月に吹らん
月前幽情 公条
- 1135 さはりあるむくら蓬のかけとてもすます心に月はみてまし
月前観空
- 1136 世中もみなありとのみ目にはみて手にとらぬ月の桂成けり
残月掛峯
- 1137 いまよりの露も時雨も有明のつれなきかけや峯の松原
初秋夕風 柳江
- 1138 草も木も秋になひきてこの夕色こそみえね天の下風
湖辺眺望 氏信
- 1138 有明の月の光もうちいて、おきよりしらむ志賀の浦波
夕立風 師兼
- 1140 夕立のなこりのかせをふきとめてしはしは涼しならの下かけ
花 元信
- 1141 村く／＼にさきましりてもこと花に心はよせぬ山桜かな
飛鳥井家二十首続哥、永享十年九月十三夜当座
- 1142 このあきそわか名はたかき家の風おさまる月のかけをみるにも
月前秋風 雅世
- 1143 くもるさへ光になりてすめる夜の月にたな引峯の秋霧
月前霧 堯孝
- 1144 みるまゝに露のやとりは数そひて月にいとはぬ村時雨哉
月前時雨 雅永
- 1145 たかまとの野へのまはきは露みえて月かけなひく秋風そふく
月前野 雅親
- 1146 時しらぬこほりもいまそしき浪に月影さむきふしの川風
月前河 雅世
- 1147 わかの浦やよるとし浪のあはれわかなれこし月は光かはらて
月前浦 雅永
- 1148 やとれ月うき身ふるえの萩の露もとの心もさすかみゆへく
月前萩 堯孝
- 1149 露ごとに光を分てしら菊の花にかさなる秋の夜の月
月前菊 雅世
- 1150 照まさる光やいつれ月の名もこよひたつ田の山の紅葉は
月前紅葉 雅永
- 1151 あさちはら月かけさむく更る夜にうらかれそむる虫のこゑく
月前虫 雅親

- 1152 月前雁 雅世
この比の夜さむの露にぬれてほす衣かりかね月に鳴なり
- 1153 月前聞鹿 堯孝
かたふくもをしねかりいはもる月の鹿の音なからふくる夜半哉
- 1154 月前擣衣 雅世
身にそしむふけ行月のをちかたにきくも夜さむの衣うつこゑ
- 1155 月前枕 堯孝
おもふ事むなしき空にかたらへは月そ涙の枕ともなふ
- 1156 月前扁舟 雅永
幾度かおなしほりえの月かけにあくかれ出るたな、しの舟
- 1157 月前逢恋 雅親
あはぬまは涙のひまやなかりけんこよひは月のかけそさやけき
- 1158 月前恨恋 雅永
かけやとすまくすか原の月にた、したまつ露の契やはなき
- 1159 月前旅 雅世
まくらにはこよひ結はて草の原わくるそ遠き武蔵の、原
- 1160 月前述懷 堯孝
この秋そ六とせ六くさの露わけて道の光に月をめてぬる
- 1161 関路雲 政法
あふ坂やきよきし水にかけみえてせき路もしらぬ峯のしら雲
- 1162 夕暮としはしなかもる程もなく月の空にそはや成にける
九月十三夜 持明院御製
冬月
- 1163 同日 家基
夕日入なこりのかたはうつろひて空をわけたる月の影哉
- 1164 同日 公守
暮はてぬ入日の跡のなか空に光をつきていつる月かけ
- 1165 同日 資宣
さそひつる月のけしきもしるき哉暮行空にみねの松風
- 1166 同日 為世
さしのほる光もみせていてにけりまた暮はてぬ山の葉の月
- 1167 同日 経資
暮まざる夕のま、に月かけもなをあらはれてすめる空哉
- 1168 同日 隆博
入やらぬ夕日の空にいて初てくる、まちける月の影哉
- 1169 同日 俊宣
暮かゝる夕の雲のたえまより又かけうすくいづる月哉
- 1170 九月十三夜 為兼
いま、てはひるのなこりもみるへきを月にまちける入逢の空
- 1171 同日 冬良
かねてこそ雲をのこさぬ影うすき月の夕の秋の山のは

- 1172 同 為実
暮はてぬ空より影のさやかにてゆふへともなき山の端の月
- 1173 同 為道
空はるゝ雲のはたてに影見えて入日にかはる夕附よ哉
- 1174 同 家親
つねよりもすむへき夜半のしるしそと夕暮かけてみする月哉
- 1175 同 定成
なかめやる山の高根にあらはれて月こそ空のくるゝまちけれ
- 夕月 隆教
またれつる時は夕への空よりそ折えて月の影はみえける
- 1176 暁月 持明院御製
おしや猶月もなこりの空もあるをまたてもしらむあけかたの山
- 1177 同 家基
おほかたの秋のなこりをしたひそへてころさへかなし有明の月
- 1178 同 公守
なかめわひぬ山のはしらむ横雲に影とをさかる有明の月
- 1179 同 資宣
鳥のねにいそくまでこそなけれども今も雲井の月になれぬる
- 1180 同 為世
さとゝをき木すゑに影はかたふきて霧にかすめる有明の月
- 1181 同 隆教
長き夜をあかすと猶も影とめて月は有明の空にすむらん
- 1182 暁月 経資
たれかいま心の色のまさるらん月なかめたゝ有明の空
- 1183 同 隆博
鳥のねのきこゆるまでも成にけりふけぬともみぬ月の夜の空
- 1184 同
あけゆけと思ひわかれすあかすみてめかれぬ空にすめる月かけ
- 1185 同 為兼
月花をかたふきはてぬ影ながら鐘より後はしのゝめの空
- 1186 同 冬良
たかうきにかこちなさましななき夜もあけ方みする月のなこりを
- 1187 同 為実
くまもなき光は空の名残にてあくるも月の影とみえつゝ
- 1188 同 為道
立こむる麓の霧はあけやうて鳥の八こゑにのこる月影
- 1189 同 家親
終夜なかむる空をたれかいまね覚はかりの月になすらん
- 1190 同 定成
月はたゝおなしさまなる影ながらあけかたみする山のはの空

- 1192 夜恋 御製
今夜さへたのみたのみて更にけりさのみの空に又あけねとや
- 1193 夜恋 家基
をのつから心かよふと見る夢のさむれはうきに又かへりぬる
- 1194 同 公守
あふとみる夜のまの夢のなかに又つらきうつゝのなきよなりせは
- 1195 同 資宣
あひみしもあひみぬよ半の思ひねもおなし夢なる心地のみして
- 1196 同 為世
とへかしな涙は袖の露とのみをきゐてなけく夜半の心を
- 1197 同 経資
徒にふけ行空をなかくてもむなしき床に又やあかさん
- 1198 同 隆博
ねられぬは待夜のとのこの夢たにもかよふたゝちの又やたえなん
- 1199 同 俊宣
たのみける契はかりはかひなくて待にむなしき夜半のどこ哉
- 1200 同 為兼
思ひ絶てねられもすへき身ならねは君はこすとも待つゝをらん
- 1201 同 冬良
人めおもふたえまは今の涙とて夜るはすからにぬらす袖哉
- 1202 夜恋 為実
恋わひてたえすなりぬとしる計こよひをきはの命ともかな
- 1203 同 為道
よもすから契うらむるひとりねの涙なかるゝつけのを枕
- 1204 同 家親
さらてたにとはれぬよ半のさひしきになけゝとなれる風の音かな
- 1205 同 定成
うつゝこそせめてかゝらぬ夢をたに待よとなれはみることもなし
- 1206 同 隆教
中くにつらさをそへてなけゝとや待よすくる心つくしは
- 1207 住吉にて八月十五夜 光広
なをさりに名も住吉の月はおし淡路の嶋に詠やらすは
- 1208 樹陰納涼 実隆
立よりし程は夏の日いつのまの我より秋のならの下露
- 1209 初冬
秋の色につるに時雨ぬ常盤木のをのか時しる冬はきにけり
- 1210 寄月恋 竹
偽に更にし宵のおもかけはのこるもつらし有明の月
- 1211 寄雲恋
しられしな我名はまたき立雲の消かへりつゝ物思ふとも

- 1212 寄山恋 竹
とへかしなきかすかほなる耳なしの山をためしの心つよさも
- 1213 寄河恋
思川おもひにしつむ身はつゐに末のあふ瀬のある世ともなし
- 1214 寄門恋
人しれぬ契はいかてうらみまし我かよひ路の門させりとも
- 1215 寄床恋
ひとりねにはらはぬ床は塵ならぬうらみも山と猶つもるらん
- 1216 寄草恋
草もけに秋は色／＼の花心うつろひやすき中そかひなき
- 1217 寄木恋
程／＼のなさはかけよ谷陰の埋木たにも花さける世に
- 1218 寄車恋 竹
けふのみのおもひそまさるみすもあらずみもせぬ人の小車のうち
- 1219 寄鏡恋
立よれば我もはつかしくもりなき鏡にうつる恋のやつれは
- 1220 七夕風 光広
天河風しつかにて初秋のけふの舟出は浪もしらしな
- 1221 郭公
おりはへてたてぬきになけ時鳥しつはた山の五月雨の比
- 1222 寄道慶賀
くらゐ山のほる道ある君か代にうれしさあまる春の袖かな
此所はしめてみしに、空くもりければ
- 1223 あま雲の空にまかへて今そみる室の八嶋にたゝぬ烟を
花光契万年 光広
- 1224 万代を君にちきりて咲花の光や四方の春にみつらん
試筆 素然
- 1225 いはふなりきみか千とせにつかへよと初もとゆひの春のはしめを
題しらす 常縁
- 1226 長月の月にもなりぬ松の葉のいつともわかすたれ詠らん
蓮 光泰
- 1227 をのつから心もすみて池水ににほふ蓮のうてなをそおもふ
驕旅 道賢
- 1228 たひ衣けふのよるへよしら浪のよそに思ひし和歌の浦舟
名所夏月 遠忠
- 1229 春の夜や逢にあひあふ影しめてみわのひはらに月はすむらん
江寒声 持頼
- 1230 霜さゆる入江のあしの夜の程に猶かれふして風わたるなり
神楽 性真
赤松嫡孫法名
具敷系図二八具トアリ
撰集二モ入歌
- 1231 すみわたる月にたくへし面影のあらずきこゆる朝くらのこゑ

- 1232 さたかなるたゝ一こゑをほとゝきすきかぬになして猶やまたまし
聞郭公 元信
題しらす 牡丹花
- 1233 わすれしなこゝろの松のおく深き軒端に匂ふ花の春風
河紅葉 盛秋統秋字
- 1234 なかれゆく水にもかけの大井川嵐のみな木々のみちは
花方盛 応全
- 1235 白雲のまかふ程こそさそふともみえつる花に山風もなし
月前雁 等貴
- 1236 すみのほる月の御船に影みえてつなて引つれわたるかりかね
寄浦恋 任円
- 1237 いかにせん人めしのふの浦わきて焼やもしほのからき思ひを
顕恋
- 1238 人しれすおもふ月日のいたつらにたつ事やすき我名成けり
春月 立承
- 1239 明ぬ夜の花の匂ひに久かたのあまの岩戸も霞む月かな
仏名 堯空
- 1240 年ふかきかしらの雪はさもあらは仏の御名につみはきえけん
野亭雪
- 1241 さひしさはなれしなからの草の戸もかれ野の雪に思ひわひぬる
- 1242 野も山もあけかたちかく成にけり鐘のこゑく鳴のはねかき
暁 兼孝
適逢恋 信尚
- 1243 まれにあふ夜半とおもへは鳥の音もまた宵なからきく心ちする
紅葉 前久
- 1244 うつし絵もをよはむものか松杉の木の色とる峯のみちは
窓燈 尚通
- 1245 そのむかしか、けし窓の燈や世にのこる名の光なるらん
谷底残雪 知仁
- 1246 春きてはとはゝや残る雪こほりさもとけかたき谷の心を
簷菖蒲 誠仁
- 1247 池水にうへぬあやめの根をさすと軒にかりふく影やみゆらん
春恋 実仲
- 1248 分わひし我かよひ路の白雪もきえ行春はぬる、袖哉
鈴虫 実右
- 1249 ふり捨てえそすきやらぬすゝむしの声する野への秋の夕くれ
沢辺鳴 持季
- 1250 うき秋の夕にかきるあはれかは鳴立さはの暁のこゑ
紅葉 宋雅
- 1251 時雨するもりの梢のつゆなから下草かけてそむる紅葉は

1261	ねさめとふ軒端の竹の風の音によのうきふしそ思ひしらるゝ	1271	鳥の音はまた夜をのこす関の戸も雪よりあくる相坂のやま
1260	山の端も天地わかすあさかすみ春やその代に立帰らん 曉述懷 定仲	1270	わたりしもうき身くるしき中／＼にかけてよしなきせたの長はし 関路雪
1259	恨てもかひはあらしないたつらにうき恋草の露ときえなは 山霞 通博	1269	つれもなき契にたくふ命とやうきには絶ていきの松原 恋 勢田橋
1258	もらさしなつらき心はみゆるともしのふを恋の関守にして 寄秋露恋 親世	1268	さたかなれさらてはしらぬ行末をつけの枕の暁の夢 寄原恋 後花園院
1257	とゝめえぬわかよの影も早瀬川なかるゝ月にたくへてそみん 忍恋 雅遠	1267	いとふそよかよふ心のたのみたになくて隔つる峯の白雲 曉 覚恵
1256	山風におつる木の葉をかけそへてわたればそよく谷の柴橋 河上月	1266	花にとひ月にまたれし山里のみちもなきまで雪はふりつゝ 隔遠路恋 長晴
1255	おもはぬと人や思はんいはてのみ心の内にくたすこゝろを 橋落葉 持和	1265	嵐ふく花のあたりはをのつから袖さむからぬ淡雪そふる 雪 岩山掃部 興致
1254	海士のたく塩木なからの烟もやをのつからなる夜半の蚊遣火 思不言恋 永基	1264	のちそなをみかきそへまし朝熊やかゝみの宮の雪の光も 落花 陶 興憲
1253	心なき草木ならすはさひしさもさそな夕の秋かせのこゑ 蚊遣火 資将	1263	昔にもたちやまさらんゆふ烟万の民の国やすくして 残雪 伊丹兵庫 毗親
1252	青柳の花のかつらに朝露の玉のかさしをさしそへてけり 秋夕 雅永	1262	山陰にかせの吹しくゆふ烟下にむせふや思ひなるらむ 薄暮烟 親孝
	柳露 雅親		寄煙恋 顯長

桂里

後花園院

1272 すむ月のくまとやならぬ一枝もおらぬ桂の里の秋かせ

滝辺蟬

1273 なく蟬のはやまをつたふ滝つせもおなし岩根に声ひく也

巖上躑躅

1274 いはつし岩にも春の種しあれば苔のみとりに花や咲らん

疑真偽恋

1275 とは、やな世は偽のうき中也さすかまことの又ましかと

寄夢無常

1276 おとろかぬ身はいつまでそさまくのみしもうつゝの夢の世中

谷春氷

1277 谷河や浪のはつ花春さえてひらけもはてぬうす氷哉

恋

後花園院

1278 武蔵野もつみにははての有物をいつを限の恋路なるらん

稀恋

1279 身を秋の一夜ならても天河契かた野にぬる、袖かな

月契秋

1280 めくりきておなしみ空にすむ月はくもらぬ秋や契置けん

滝花

1281 桜さく山の岩根にみたれきてうちはへ匂ふ滝のしら糸

七夕

1282 あまつ風夜寒やいそく七夕のをる手ひまなき雲のは衣

岸柳

1283 こく舟につむやま柴も青柳の糸もてつなく宇治の河岸

神楽

後花園院

1284 霜さゆる神のみまへにから衣をりはへうたふさか木はのこゑ

寄庭恋

竹

1285 待夜のみ積りはてなはさむしろにいつかは床の塵もはらはん

柳垂糸

知仁

1286 さほ河やなひく柳の糸はへて水のあやをる春風そふく

夜梅

1287 咲梅は下ゆく水を色香にて花の鏡をみかく月かけ

寄鏡神祇

1288 まもれなを岩戸をいて、真祖鏡天てる神の代を伝へきて

寄花契恋

1289 うつろはむ色をはかねてたのましなつらなる枝の花にさくとも

寄花待恋

1290 うつろへは待し日数も此ころの誰ゆへならぬ花やうらみん

寄橋恋

1291 あやふむもたか心としてしはしなをとたへかちなる夢のうきはし

- 1292 近恋
そをたにも又なくさめて中垣のこゑきく程の身をたのめとや
炭竈
- 1293 冬こもる心はみえしをの山にやくすみかまのけふりならては
寄夜恋
- 1294 いまはとて思ひたえすはむは玉の夜の程いかに独かもねん
寄忘草恋
- 1295 思へとも遠さとをのに住吉の岸なる草の名をやつまゝし
寄風恋 正徹
- 1296 人心あらき風ともまたしらす袂の露のなにくたくらん
庭上梅 玄旨
- 1297 みな人のたちよるはかり梅か香の四方に吹なす庭の春風
冬恋 後花園院
- 1298 人はまた心とけてやあかすらん涙もこほる袖の霜夜を
杜杉 兼成
- 1299 山風の杉の木のまを吹からに日影も露も杜の下道
聞時鳥 季経
- 1300 なのれ猶真砂の数もほとゝきすたゝ一こゑをきくのなかはま
落花埋路 季種
- 1301 ちりしくも匂ひを花にのこさすは春ともわかし雪のかよひち
- 1302 寒夜月 為広
霜まよふ枕の嵐声さえて軒端の山に有明の月
寄月恋 尊応
- 1303 まちおしむ心や月にみえなましうき暁もつらき夕も
寒月 雅世
- 1304 かたしきの衣手うすぐ成にけり夜をへて月やさえまさるらん
冬地儀 元長
- 1305 氷ゐて波なき比のしらなみや雪ふきみたささほの河風
寄浅茅恋 仁悟
- 1306 たのまめや人の心の浅茅生にむすふも露のあたし契は
三月三日 重治
- 1307 盃にうかへし花のなかれきてあかぬ弥生のみはか水かな
都歳暮 尚顕
- 1308 今はとて暮ゆくとしを九重の宮この外もさそしたふらん
水鳥 実隆
- 1309 水鳥のはまの真砂をふむ跡も千世をかさねん筆のうみ哉
鹿声為友
- 1310 秋ふかき朝夕きりの山里にたゝおきふしもさをしかのこゑ
寒草虫吟 教国
- 1311 ま萩原霜のふるえになきかれてこゑも色なききりくす哉

- 1312 名所野 雅康
秋の花も思ひやられて宮城のや小萩かものしける此比
- 1313 水辺納涼 伊長
陰ふかきしづくにぬれて山水はむすはぬ袖も涼しかりけり
- 1314 古寺鐘 正広
たかきなを雲井にあけて寺の鐘こゑはおほろの春の夜の空
- 1315 寄床恋 昌叱
みせはやなどはれぬまゝにちりひちの山ともなれる床のあはれを
- 1316 卯花 宋世
うつ木さくこの川かみや布さらすいくの、里と人やとひこん
- 曙時鳥 雅康
- 1317 夕よりいつくの空をめくりきて又ね覺とふ山ほとゝきす
- 時雨 宋世
- 1318 村時雨いまいくかあらは神無月霜ふり月に名をかへてみん
- 積雪 慶運
- 1319 かくてはやいくへになりぬ庭の面のまかきは山とつもる白雪
- 橋上月 隆永
- 1320 あはれとも思ひ渡るや橋柱月の光はむかしなからに
- 寄琴恋 宣親
- 1321 あはれとは誰かきくへき玉琴のおもひあまりてねにたつとも
- 1322 遠尋花 雅行
花にのみ心をかけてたつね入吉野のおくは道もおほへす
- 鳥 雅俊
- 1323 あるか中にいかなる鳥そみな人の夢をさめよとつくる八こゑは
- 鴨 成仁
- 1324 川の名のかものは風も音そへてたちゐひまなくさはく波哉
- 重治
- 1325 いつくにかうきねたのみてあし鴨のこほる汀をむれて立らん
- 為広
- 1326 水草は冬枯はてゝ霜はらふ鴨の羽何そみとりさきたる
- 返書恋 基綱
- 1327 かひなくもかへすつらさは夢もみぬよるの衣ににたる文かな
- 海辺冬鶴 公兼
- 1328 冬ふかみ浦風あらくよる浪に芦辺の鶴も声さはくなり

〔初句索引〕

あ

あかしがた 125
 あかすなほ 1024
 あかすみし 240
 あかすみて 468
 あかすみむ 637
 あかたへと 677
 あかつきの 26
 かねきくたひに 754
 さむきしもよも 827
 まかきのほしの 494
 あかつきは 959
 あきかせに 552
 ふきしほれたる 894
 わすれしねやの 37
 あきかせも 80
 あきかせや 164
 あききては 65
 あききぬと 1103
 あきたけぬ
 あきならぬ

1103 164 65 37 80 894 552 959 494 827 754 26 677 637 468 240 1024 125

あきならは
 あきにふく
 あきにみし
 あきのいろに
 あきのいろも
 あきののに
 あきのはなも
 あきはきの
 あきふかき
 あきもけふ
 あきもやは
 あきやなほ
 あきらけく
 あきをうしと
 あきをのみ
 あきをへて
 あけかたの
 あけてみは
 あけぬよの
 あけはまた
 あけほのの
 やまかとみえて
 やまのすかたの
 あけゆくや

917 434 587 1046 1239 780 504 1101 867 1030 215 16 12 350 1310 55 1312 747 571 1209 599 828 162

あけゆけと
 あけわたり
 あけわたる
 ひかりのうちの
 やまのあらしの
 あさあけに
 あさくらや
 あさしもの
 あさたちて
 あさちはら
 あさつゆの
 あさといての
 あらしになひき
 のきはうめに
 あさなあさな
 あさひさす
 あさほらけ
 あさゆふの
 あしかもの
 のこるしもをや
 むれゐるかたの
 あしかもも
 あしからや
 あすかかせ

1134 620 497 127 820 854 253 108 518 881 221 461 1151 1131 891 409 886 860 95 478 1184

あすよりの
 あたにおく
 あちきなや
 またかはかりの
 わかよはけふか
 あつさゆみ
 あつまちを
 あつめえぬ
 あとたえて
 あとつけて
 あとつけぬ
 あはぬまは
 あはれとは
 あはれとも
 いつかはひとに
 おもひわたるや
 あはれにも
 あはれまた
 あひみしは
 あひみしも
 あひみてそ
 あひみての
 あひみては
 あふきをも

179 691 688 653 1195 858 300 415 1320 417 1321 1157 24 584 819 725 1022 134 398 651 246 323

あふくなの
あふことの
つきひになして
ならひしらねは
あふことは
あふさかに
あふさかの
せきちくるしき
せきはるかに
あふさかや
あふとみる
あふひくさ
あふひとも
あくもの
そらにまかへて
をくらのやまに
あまころも
あまたたつ
あまつかせ
ちかひのままの
よさむやいそく
あまつそら
あまてらす
あまのかは

233

770 788 1282 261 133 88 376 1223 384 916 1194 1161 480 641 91 1016 683 534 174

いくよのあきの
かせしつかにて
よるへまとほに
あまのたく
あめさむみ
あめつちの
あめはるる
あやうくも
あやなくも
あやふむも
あやめひく
あゆはしる
あらしふく
くもにあられを
はなのあたりは
あらしやま
あきのにしきの
ふもとのおちは
あらたまの
あられふる
あらをたや
ありあけの
あきそなこりは
つきのひかりも

1139 412 289 822 268 928 99 1265 499 861 372 1291 802 541 447 787 123 1254 51 1220 201

ありかはに
ありはてぬ
あるかなかに
あをやきの
いとをあはをに
はなのかつらに
い
いかさまに
いかてひとに
いかならむ
いかにさて
いかにして
あとなきものと
ひとはいとむ
いかにせむ
さすかちきりは
しくれにもなほ
つつむひとめも
ひとめしのふの
またつみしらぬ
いかにまた
いかばかり
いくあきか

542 729 756 1237 918 1108 717 228 662 1084 298 1102 689 1252 441 1323 507 870

おなしかはせに
ゆくもかへるも
いくあきの
いろもかはらて
ためしにひかむ
いくたひの
かみとあかすや
しくれのくもを
いくちよか
いくちよも
いくとせの
いくゆふへ
いけのおもの
いけみつに
いこまやま
いすかは
いせのあまの
いたつらに
おもひみたれて
しらすはなほも
ふけゆくそらを
やまわけころも
いたまもる
いつくにか

601 1063 1197 109 707 675 885 280 1247 189 202 324 1007 784 907 1020 351 297 213 348

うきなたのみて
 やとりとはまし
 しつしかと
 いつのまに
 かくはなるみそ
 なれぬるみとは
 いつはあれと
 いつはりと
 いつはりに
 こよひやなさむ
 ふけにしよひの
 いつはりの
 あるよなからも
 ころをととりや
 いつまでか
 いつまでと
 いつもみる
 いつらこの
 いつるひの
 いつれとか
 いつれとも
 いてやらぬ
 いととしく
 いちはすよ

1126 3 481 455 926 278 11 383 306 933 317 742 1210 1122 859 1127 721 400 890 1053 1325

いとはやも
 いとはるる
 いとふそよ
 いにしへの
 あきこそいとと
 さくらをくもと
 いにしへは
 いのりきや
 いのりても
 いはしみつ
 さらにいはいし
 たえぬるをくむ
 いはすとも
 いはつつし
 いはてうし
 いははしの
 いはふなり
 いはれのの
 いひかはす
 いひよらむ
 いへはえに
 いまこむと
 いまさらに
 いまはうしと

355 454 1117 1032 669 667 745 1225 491 356 1274 664 786 260 686 979 135 583 1015 1267 695 1112

いまはとて
 おもひたえすは
 くれゆくとしを
 いままでの
 いままでは
 いまよりの
 つゆもしくれも
 ゆふへのそらに
 よさむのつゆや
 いまよりや
 いむなりと
 いもせかは
 いやしくも
 いりあひの
 いりえこく
 いりやらぬ
 いろうつす
 いろかへぬ
 いろまさる
 う
 うきあきと
 うきあきの
 うきくさの

741 1250 987 732 490 172 1168 521 476 765 640 602 1064 38 320 1137 1170 668 1308 1294

うきくもの
 うきなかを
 うきふしも
 うきままに
 うきよとて
 うきよをは
 うきをかこち
 うきをしる
 うくひすの
 うすきりの
 うすくこき
 うちかはや
 うちとけて
 うちなひき
 うつきさく
 うつきまで
 うつしうゑて
 うつしきて
 うつしゑの
 うつしゑも
 うつつこそ
 うつのやま
 なほいかばかり
 わかははるに

225 592 1205 1244 956 1061 1055 142 1316 150 618 724 294 374 1115 281 759 898 540 27 321 292 849

うつひとも
 うつみひの
 うつもるる
 たけのすゑはや
 まかきのたけを
 うつもれて
 それともみえぬ
 くれたけの
 ひとむらの
 ゆきにもいまは
 うつりこし
 うつろはむ
 うつろへは
 うめにほふ
 うらかせに
 うらかせの
 うらかせも
 うらかせよ
 うらかれの
 うらふれて
 うらみしを
 うらまつの
 うらみすや
 うらみても

834 771 955 98 477 381 749 1121 781 728 1290 1289 578 117 632 636 628 629 502 19

かひはあらしな
 ひとのこころは
 うらみわひぬ
 うらむるは
 え
 えそあかぬ
 えにあらふ
 にしきとそみる
 にしきはこれか
 えたかはす
 お
 おいにける
 おいらくの
 おきつかせ
 おきまよふ
 おきあつつ
 おくしもの
 おくふかく
 おけはちる
 おくこめて
 おとたてて
 おとたてぬ

69 68 842 950 647 977 611 604 1018 138 515 194 920 1011 2 900 929 1044 1259

おとろかす
 おとろかぬ
 おなしくは
 おなしよに
 おのつから
 いくとしなみか
 こころかよふと
 こころもすみて
 もしほのけふり
 おほあらきの
 おほかたに
 おほかたの
 あきのなこりを
 ひかけにほふ
 おほろなる
 おほろかは
 おもかけに
 おもかけは
 おもかけも
 おもはねと
 おもひいての
 おもひおく
 おもひおけ
 おもひかは

1213 291 696 998 1255 1090 271 535 370 1069 160 1178 191 803 958 1227 1193 187 764 879 1276 537

おもひたえて
 おもひねの
 おもひやる
 こころにたえむ
 こころのちしほ
 ほしのちきりも
 おもひやれ
 おもふこと
 おもへとも
 か
 かかみやま
 かからすは
 かかりひの
 かきくらし
 かきりあれは
 かくてはや
 かけかへし
 かけさむみ
 かけたかき
 かけふかき
 かけやとす
 まくすかはらの
 めてのたまみつ

804 1158 1313 918 603 585 1319 597 739 524 1076 379 1295 1155 902 866 32 185 222 1200

かけをのみ
かさしをる
かさねぬる
かすかのの
かすとても
かすみしく
かすむよの
かすめとめ
かせさゆる
かせすくる
かせにちる
かせのうへに
かせのなの
かせはこふ
かせわたる
かそふれは
かたしきの
かたしくも
かたふかて
かたをかの
かちのはに
かつらきの

832 44 816 1153 238 554 1304 799 52 904 209 288 877 198 821 305 403 1082 887 349 435 710 152 778

かならずと
かねてこそ
かねてより
かねのおとは
かねはよひ
かはおとも
かはかせに
かはかりの
かはそひの
かはのなの
かひなくも
かへすへき
かへるかり
かへるさを
かみかきに
かみたにも
かみなつき
かみにとや
かみやまや
かりくらし
かりそめの
かりひとの
かれはてし

1074 153 679 1118 1041 25 168 714 10 559 382 436 1327 1324 1087 940 1128 377 761 293 36 1171 684

き
きえかたき
ききすてて
ききのはは
ききふかき
ききわかぬ
きくやいま
きたよりそ
きぬきぬの
きのふかも
きのふけふ
きのふまで
きふねかは
きみかみむ
きみかよに
ちたひうつさむ
はやあふさかの
きみかよは
きみにちきり
きよみかた
きりきりす
く
くさのはに

422 1014 395 283 516 910 790 114 692 853 564 401 936 20 846 67 190 493 1124 952

くさまくら
かりなるゆめの
つゆのまはかり
くさもきも
あきになひきて
けさはきのふの
なひくはかりの
くさもけに
くちなしの
くまもなき
くみてみよ
くもきりも
くもにふし
くものうへに
くもはらふ
くもはれて
くもふかき
くももうし
くもるさへ
くもるより
くもゐをは
くやしくそ
くらゐやま
くるとあくと

880 1222 236 993 433 1143 405 862 1130 614 137 421 484 230 1187 144 1216 340 963 1138 1042 706

さくらまち	やまのいはねに	とほやまもとの	さくらはなも	さくらはな	さくうめは	さくうめの	さきわくる	さきやらぬ	ねかひのままに	ちきりをするも	ちきりもうれし	さきのよの	さきにたつ	さきにつく	さきさかぬ	さかつきに	さかこえむ	さえさえし	さ	こゑをなす
734	1281	544	58	448	1287	964	573	197	330	661	658	183	722	871	334	1307	1004	269		878

さほかはの	さひしさを	さひしさは	さはりある	さはのしき	さなへとる	さとはあれて	さとのなも	さとのあまの	さとはき	さてもなほ	さてもうき	さためなき	さたかには	さたかなれ	ねぬよのゆめの	たたひとこゑを	さたかなる	さそひつる	さしのほる	ささのはも	ささはりの	ささなみや	ささかにの
-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	--------	------	-------	-------	-------	-------	-------	---------	---------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

899

577	731	1241	1135	951	588	528	1023	331	1181	740	935	188	267	1268	931	1232	1165	1166	579	1080	782	809	
さをしかも	ほしのあふよは	つまはよもきか	さをしかの	さらにいま	さらてたに	さよふかき	さよちとり	さゆるよの	さゆりさく	さもあらぬ	ふらぬたえまの	にはもとやまも	さみたれは	さみたれの	みかくれぬとも	おつるもうめの	さみたれに	さまさまに	はるのころもを	そてにたくかと	いかにそむらむ	さほひめの	さほかはや

903	47	574	234	1204	341	496	129	566	1116	776	856	1054	565	244	357	556	439	967		1286
しはひとの	しはしなほ	しはしたた	しはしこそ	しのひねも	しのひねは	しなのなる	しつけさは	したをれの	したをるる	したみつを	したふとは	したひもの	したはまて	したはしな	しくれるる	しくるなり	しきたへの	しかのうらや	し	さをとめの

しほかせの
しまかくれ
しみつにも
しめおくも
しもかれて
しもかれの
しもさむき
しもさむみ
しもさゆる
いりえのあしの
かけすさましく
かみのみまへに
しもにたた
しもまよふ
しもむすふ
あまつをとめの
のはらのあさち
しももや
しもゆきを
しもよりも
しもをさへ
しらくもの
しらくもの
しらすみの

606

925 217 1235 360 250 1027 486 75 319 1302 598 1284 613 1230 128 136 1088 17 471 311 235 981

しらつゆの
おきそふほとも
おのかなにあふ
たまのをにとや
しらなみの
しらゆきの
しられしな
いろにいてしと
わかなはまたき
しるやきみ
しろたへの
かけをかさねて
ころもほすてふ
まさこのみちに
す
すかこもの
すかのねの
すすしさも
すまのあまの
すまのうら
すみのほる
すみれさく
すみわたる

1231 155 1236 94 325 339 1001 865 1033 156 617 256 1211 1109 239 367 546 100 54

すむつきの
すむひとの
すむひとを
すりころも
すゑかけて
せ
せきあへぬ
せきかへす
そ
そことなき
そてにもる
そてぬれて
そてのいろも
そてまでも
そともなる
そのいろと
そのむかし
そめてほす
そらとなり
そらにたつ
そらのうみ
そらのうみの

600 1070 313 844 805 1245 966 346 994 407 375 276 549 1052 690 1047 646 883 626 1272

そらのみとり
そらはるる
そをたにも
た
たえすおく
たえたえの
たえねたた
たえはてぬ
たかうきに
たかかたの
たかきなを
たかこころ
たかさにと
たかさとも
たかそても
たかために
いかにつらむ
いそくゆききそ
たかのなの
たかねなる
たかねには
たかまとの
たきくちの

304 1145 831 121 77 1028 750 693 116 772 712 1314 479 1168 937 685 921 716 1292 1173 796

たきしめし
たきとのの
たけあめる
たちかへり
かけをたにみて
たたくもあけす
たちこむる
たちとをは
たちぬれて
たちのほる
たちはなに
たちはなの
かをるゆふへの
にほひそのこる
たちよりし
あちよれば
たつしきの
たつたかは
みつにせきても
ゆきけのみつに
たつねくる
たつねはや
たてかふる
たとるそよ

359

709 785 408 812 1009 145 591 1219 1208 1068 810 459 922 371 746 1188 680 322 1031 508 464

たなはたに
あふきのかせを
あらぬわかみも
たなはたの
いほはたものに
おなしためとや
おるてにかけぬ
おるてふいと
くれまつけふは
なとはつあきと
なみたのつゆに
たなはたも
いはとのせきの
ぬるよはひとよ
たにかはや
たにのとは
たねしあれは
たのますよ
たのまめや
たのみける
たのむそよ
たのめきて
たのめつつ
たのめとよ

713 850 657 954 1199 1306 676 275 522 1277 869 345 40 39 864 570 49 46 1078 687 868

たのもしな
いつつのりの
ちかひあまねき
たひころも
けふのよるへよ
しほりはてけり
はるかにこえて
たひたひの
たひねする
たひひとの
たひひとや
たまあられ
たましひを
たまつさも
たまとみる
たまのをを
たむけせし
たむけとや
たゆへしと
たれありて
たれかいま
たれかみむ
たれすみて

193 31 1182 440 941 896 1114 216 53 824 762 23 1026 358 1096 678 769 852 1228 332 1000

ち
ちきりをも
ちとせまで
かきりはしらし
かみやまもらむ
ちとりなく
ちはやふる
ちひろある
ちへにおもふ
ちらぬまは
ちりしくも
ちりやすき
ちりゆくを
ちるはなの
ちををしむ
つ
つきかけに
つきならて
つきにうき
つきにしも
つきにとひ
つきのゆく
つきはたた

つきはなを
つきもいま
きよきはらの
あてのわたりの
つきもひも
つきをうき
つけわたる
つたへきく
つちのおと
つなかれよ
つなきおく
つなてひく
つねよりも
つにくにの
つみそめて
つもりそふ
つもれなほ
つゆことに
つゆしもも
つゆとのみ
つゆなから
つゆにさきて
つゆにしめる
つゆによれ

337

473 1060 596 73 835 327 1149 638 503 986 792 1174 838 530 1092 751 997 965 463 231 962 296 1185

つゆはたまと
つゆほとも
つゆやなな
つよからぬ
つらかりし
つれなさの
かはらぬいろを
こころもとけて
つれなしと
えやはいふへき
おもひそはてぬ
つれもなき
ちきりにたくふ
ひとのこころの
て
てりそはむ
てりまさる
てををりて
と
ときぎぬと
ときしらぬ
こほりもいまそ

1146 336 895 1150 1077 1059 1269 178 446 760 1057 648 15 814 763 525

やまかせさえて
ゆきとつきとや
ときのまも
としくれし
としこえし
としせめて
としつきの
としふかき
としもまつ
ととめえぬ
とはすとも
とははやな
うてはくたくる
おもふうきみの
よはいつはりの
とはれねは
とふほたる
おのれもえてや
ひまゆくかけの
とへかしな
きかすかほなる
さくやまふきの
なみたはそでの
とほひかた

1039 1196 1029 1212 568 984 110 1275 237 576 701 1257 465 1240 906 795 369 989 1043 833 991

な
なかきよに
なかきよも
なかきよを
なかそらに
くもとみるも
てるひのかけは
なかつきの
つきにもなりぬ
つきのなたかく
なかなかし
なかなかに
ななめやる
あきのなかはも
いけのこほりに
ともすひに
ともすれは
ともなひて
とりかねと
とりのねに
とりのねの
とりのねは
とをつあまり

301

173 165 1206 938 93 1226 277 753 1191 181 163 581 1271 1183 1180 672 1045 257 919

やまのたかねに
なめゆく
なめわひ
なめわひぬ
なれいつる
なれきて
なれゆく
なきてこし
なきてたに
なきはみな
なくかりの
なくさまぬ
なくせみの
なくむしの
なくむしも
なけくそよ
なこりあれや
なつころも
なつのひも
なつのよは
なつやまの
なとりかは
なにおもふ
なにかおもふ

1058 195 982 893 199 915 1035 547 28 1094 186 1273 901 81 274 999 243 1234 498 1002 801 1179 1019 1175

なにしおふ
なにかき
なにかは
なにとなく
なにのみちと
なにはえに
なにはえや
あしのつのくむ
かれてもしけき
なにはつの
なにゆゑと
なにをかは
なのれなほ
なひきふす
なひくかと
なひくてふ
なひくとも
なへておく
なへてよに
なへてよの
こころのはなも
こすゑのはなも
はなのはるたつ
はるをのけとみ

363 794 595 364 1037 744 911 775 635 431 1300 83 224 1010 120 443 119 580 996 572 848 456

なほさりに
なほさりの
なほのこる
なみあれは
なみたさへ
なみたほす
なみのそこ
なみよする
なれてきく
に
にはのおもは
にはもせに
にほのうみや
なみのいつくそ
ひらのねおろし
にほはすは
ぬ
ぬきかふを
ぬさとちる
ぬししらぬ
ぬしやたれ
ぬるよとて

1081 82 705 6 453 957 500 220 97 609 184 527 397 656 909 406 720 378 1207

ぬれてほす
ね
ねかはくは
ねさめとふ
ねられねは
の
のきちかき
ひときのはなの
もみちのこすゑ
のこりぬる
のこるへき
のちそなほ
のとかなる
そらにはなほも
みなみのきしに
のへのつゆ
うつろひやすき
やまのしつくと
のへはみな
のへみれは
のもやまも
あけかたちかく

ふくるよは

616

ふゆそとは

593

ほしわふる

703

またるは

396

またれつる
 まちえたる
 まちすきし
 まちてきき
 まちなれし
 まちわひぬ
 まちをしむ
 まつことも
 まつたひに
 まつにふく
 まつはなほ
 まつひとや
 まつよのみ
 まつよひの
 まはきさく
 まはきはら
 しものふるえに
 ちくさのいとを
 まもるらむ
 まもれとよ
 まもれなほ
 まよひこし
 こひちのすゑの
 ゆめちへたてて

287 704 1288 30 789 76 1311 56 673 1285 1075 624 939 660 9 1303 203 1111 205 42 4 1176

まれなりと
 まれにあふ
 み
 みかりにも
 みこそなほ
 みせはやな
 みそきかは
 みたれあふ
 みちかよの
 みちかよの
 みちしほの
 みちのへや
 みつくきの
 をかのかりはの
 をかへもしるく
 みつくさは
 みつしほの
 みつせかは
 みつとりの
 みなかみに
 みなくちの
 みなそこも
 みなとえや

567 1104 451 241 1309 1067 1013 1326 130 131 586 719 462 161 263 813 1315 259 149 1243 700

みなひとの
 みにかきる
 みにしむる
 みにそしむ
 あきなきなみも
 ふけゆくつきの
 めにはさやかに
 みぬひとに
 みねのくも
 みねのゆき
 みのうへに
 みのとかに
 みひとつにか
 みやきのの
 みやこいてて
 みやこなる
 みやこをは
 みやまとて
 みるうちに
 みるまに
 みるやたれ
 みをあきの
 む

1279 361 1144 444 489 806 665 768 61 255 536 399 1051 308 388 33 1154 344 214 428 1297

むかしいまの
 むかしにも
 むさしのも
 むつきてふ
 むつことも
 むらさきも
 むらしくれ
 いかてちしほに
 いまいくかあらは
 ふるかたみえて
 むらむらに
 むれたちて
 め
 めかれすよ
 めくりあふ
 めくりきて
 めくるひの
 めにはみて
 も
 もしほやく
 もちつきの
 もとめしな

774 817 815 674 932 1280 945 560 430 1141 103 1318 1085 985 654 211 1278 1263 29

もとゆひの
ものおもふ
ものこしの
もののふの
もみちせむ
もみちはは
もしきや
ももちたひ
もらさしと
もらさしな
もるたぬに
もるつゆを
もれいてて
もろひとの
きてはみれとも
けふはみそきの
とひくるよりそ
や
やかてまた
やとれつき
やまかけに
やまかせに
やまかせの
いなはもそよと

973 1256 1262 1148 755 424 200 474 666 63 118 1258 655 737 251 1017 487 992 533 419 605

すきのこのまを
たたくゆふへは
ふきぬるままに
やまかはに
かへらぬみつは
なかるるはなを
やまさくら
かさすもあれと
やまとにはあらぬ
やまたかみ
おつとはみえず
ふもとのたけは
やまとりの
やまのはに
やまのはの
やまのはも
やまのぬの
やまはまた
やまひとの
やまひめの
やまふかみ
やまふきの
やまもみな

264
386 290 302 249 492 558 147 1260 485 418 328 622 726 5 425 855 845 404 839 1299

ゆ
ゆきかへる
ゆきかよふ
ゆきとのみ
ゆきのなかに
ゆくあきの
なこりをとめよ
わかれしのへは
ゆくさきを
ゆくすゑの
ゆくつきの
ゆくはるの
ゆくひとを
ゆくまに
ゆふくれと
ゆふさは
くさのはことに
ささなみよする
ゆふたちの
ゆふたちは
ゆふつくよ
ゆふなみの
ゆふひいる
ゆふひかけ

169 1163 681 411 1021 1140 914 526 1162 520 511 154 610 482 944 414 223 1089 432 694 74

ゆふひさす
あきのやまもと
もみちのにしき
ゆふへより
ゆみはりの
ゆめにたに
ゆめをふく
よ
よさのうみ
よしさらは
またこむはるや
よはのなかはも
わすれはつへき
よしのかは
いはとかしはを
いもせのなかの
はなはちりにし
よしのやま
おもひいるへき
わすれぬはなの
よしやその
よしやたた
よそにきく

347 204 248 548 825 1049 22 983 836 966 449 948 961 663 85 1317 1062 78

よそにもし
よなよなの
よのうさや
よのなかは
よのなかも
よひよひの
よもすから
おもひもとかす
そよきしおとの
ちきりうらむる
なかむるそらを
よやなかき
よよへても
よるなみは
よるのあめの
よるよるは
よろつよを
よわらすは
よをわたる

わ

わかいのち
わかうへに
わかうらみ

146 273 723 226 207 1224 1093 1038 353 743 66 1189 1203 14 1132 748 1136 148 1110 352 643

わかかたを
わかきみの
あふくにかみも
ゆたかなるよを
わかくさは
わかこころ
わかこひは
わかなかは
わかのうらの
わかのうらや
わかはずむ
わかみさへ
わかみこそ
わかれちの
わくらはに
わけいてむ
わけいりて
わけいれは
わけくらし
わけてその
わけのほる
わけまよふ
わけゆけは
わけわひし

1248 971 466 1003 730 368 1079 934 943 1098 718 139 60 402 1147 513 670 791 697 270 343 783 538

わすれしな
いつはありとも
こころのまつ
そののちのよの
たたゆめはかり
わすれしの
わたつうみの
わたのはら
わたりしも
わりなくも
われさへに
われなくは
われはたた
ゑにかける
ゑ
を
をきのはも
をきをふく
をさまれる
をさめしる
そのよにかへせ
よはたれかはと

1071 543 990 64 659 45 180 272 888 649 1270 1123 589 708 645 1048 1233 387

をしからぬ
をしねまで
をしめとも
をしやなほ
をとめこか
をのえの
をはなく
をみなへし
をやまたの
をりしもあれ
をりはへて
しのたのもりの
たてぬきになけ

1221 391 329 318 71 905 1073 219 1177 452 509 841